

【論文9】

「半座を分かつ」伝承について

岩井 昌悟

【0】はじめに	141
【1】帝釈天が「半座を分かつ」伝承	143
【2】その他の「半座を分かつ」伝承	155
【3】「半座を分かつ」伝承の意味	157
【4】釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承	158
【5】パーリ文献の伝承	164
【6】摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承の意味	167
【付録】中国撰述文献に見られる釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承	170

【0】はじめに

【1】摩訶迦葉は仏教教団の中でどのような地位にあったのか。この問題に関しては本モノグラフ所載の【論文8】「摩訶迦葉 (Mahākassapa) の研究」でほぼ明らかにされている。それにもかかわらず、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったという伝承をここに殊更に扱って拙論を立てるのは、以下のような理由による。

この「半座を分かつ」という表現は釈尊と摩訶迦葉との間に限定されず、誰々が誰々に「半座を分かつ」という伝承が多くの経典や説話文献に見られ、ひいては *Mahābhārata* などにも同様の記事が存する。本論はこれらを調査することによって「半座を分かつ」伝承の意味を明らかにし、そこから釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったという伝承が摩訶迦葉にどのような属性を付与しているのか検討を加えようとしたものである。この作業は摩訶迦葉の人物像をより鮮明にすることに寄与するであろう。

また釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」という伝承は漢訳経典には数多く存するにもかかわらず、パーリ文献には見られないという重要な特徴を有する。このことから北伝と南伝との間に摩訶迦葉の教団内における位置づけに関して差異が存在した（北伝伝承が南伝伝承よりも摩訶迦葉を重視していた）といった見解も生じ得る。そのような見解が妥当か否かも、この研究によって判定を下せよう。

【2】誰々が誰々に半座を分かつという行為は、現代の日本人にとって決して理解不能なものではないため、奇異な印象もなく自然に受け取られるかもしれない。

実際、「半座」‘ardhāsana’を Böhtlingk と Roth の *Sanskrit-Wörterbuch* で引いてみると ‘halber Sitz; einem Gaste die andere Hälfte des Sitzes anbieten gilt für eine grosse Ehre’ 「半分の席；客に席のもう一方の半分を提供することは大きな敬意を示す」とあり、

用例として *Śākuntala*、*Raghuvamśa* (6.73)、*Kathāsaritsāgara* (17.110) が挙げられている。他の辞書もこれにもとづいている。*Śākuntala* には天界で帝釈天のもてなしを受けたドゥシュヤンタ (*Duṣyanta*) 王が帝釈天の半座に坐ったことが言及されており<sup>(1)</sup>、*Raghuvamśa* にはラーマの祖父 (ダシャラタ *Daśaratha* の父) であるアジャ (*Aja*) が帝釈天の半座を占めたとあり<sup>(2)</sup>、*Kathāsaritsāgara* は一挿話の中で、人間の妻になった (しかし同衾はしない) 天女ソーマプラバー (*Somaprabhā*) が姉の天女とならんで樹上の玉座に坐り食事をする場面を描いている<sup>(3)</sup>。*Kathāsaritsāgara* の用例は姉妹の関係にある2人であるから一つ座に坐っても特別な意味はないとも考えられるが、*Śākuntala* と *Raghuvamśa* の用例では帝釈天が「大きな敬意を示」して人間界のすぐれた王に半座を分かつと理解できよう<sup>(4)</sup>。

しかしながら、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつのは単なる「大きな敬意を示す」どころではすまされないように思われる。なぜなら釈尊が半座を分かつたのは摩訶迦葉ただ一人であり、二大弟子の舍利弗・目連でさえもそのような榮譽に預かってはいないからである。

「半座を分かつ」行為には我々が自然に受け取ることができるよりも、もっと重要な隠された意味が含まれているのではないであろうか。

- (1) *The Abhijñānaśākuntalam of Kālidāsa*, edited by Kale, tenth edition, 1969, p.252; mama hi divaukasāṃ samakṣam ardhāsanopaveśitasya.

antargataprārthanam antikasthaṃ jayantam udvīkṣya kṛtasmitena /  
āmṛṣṭavakṣoharicandanāṅkā mandāramālā hariṇā pinaddhā // 2 //

神々の面前で、私 (ドゥシュヤンタ王) が〔帝釈天の〕半座に着座した時に、

〔ドゥシュヤンタ王と同様に扱われたいという〕願望を内に秘めて傍らに立つ〔息子の〕ジャヤンタを見やって、微笑を浮かべつつハリ (帝釈天) は、胸〔に塗った〕ハリチャンダナが擦れて印がついたマンダラ花の華鬘を編んだ。

- (2) *The Raghuvamśa of Kālidāsa*, critically edited by Rewā Prasāda Dwivedī, New Delhi, 1993, p.196

airāvātāsphālanaviślatham yaḥ saṃghaṭṭayann aṅgadam aṅgadena /  
upeyuṣaḥ svām api mūrṭtim agryam ardhāsanam gotrabhido 'dhitaṣṭhau // 73 //

彼 (アジャ) は、アイラーヴァタ象が耳をパタパタと打ち合わせるのにもなって揺れる〔帝釈天の〕腕輪と〔自身の〕腕輪がこすり合う〔ほど帝釈天に身を寄せ〕、〔帝釈天は〕自身〔と同じ〕最上の容姿の〔アジャに〕身を寄せて、〔アジャは〕牛群を開放する者 (帝釈天) の半座を占めた。

- (3) *Kathāsaritsāgaraḥ*, Motilal vanarsidass, Delhi, 1970, p.058.

atraivāruhya vṛkṣe ca tasyā ardhāsane tadā /  
upaviṣṭhāṃ svabhāryāṃ tām guhacandro dadarśa saḥ // 110 //  
tatkālam tulyakānti te saṃgate divyakanyake /  
paśyatas tasya bhāti sma sā tricandeva yāminī // 111 //

そこで樹に登って半座に坐っている自身の妻をグハチャンドラは見た。

その時、等しく美しい、いっしょにいる2人の天女を見ている彼には、夜は3つの月が出ているかのように見えた。

- (4) なお本論で述べることの先取りになるが、ここに挙げた3例について、*Śākuntala* の例は以下の【3】見る、父が息子に半座を分かつケースに対応する。ドゥシュヤンタ王は帝釈天の息子であるジャヤンタの代わりに半座を分かたれているからである。*Raghuvamśa* の例

は半座を分かつ者と分かたれる者の容姿が等しいケースであり、*Kathāsaritsāgara* の例は一つ座を共有する2人が、容姿が等しく同等の権限・地位を共有するケースに対応すると見ることができよう。

[3] 本論の担当執筆者（岩井）が、かつて自身の修士論文「アヴァダーナ・カルパラター第4章マーンダートリ・アヴァダーナ研究」の準備のためにマーンダートリについて資料整理を行ったことがあり、マーンダートリが帝釈天から半座を提供されることについての資料がすでに手元にあった。そこで、【論文8】の準備中に我々の定例研究会で摩訶迦葉の半座が問題になった時に、両者の比較を通して「半座を分かつ」伝承の意味を探れないかということになり、それが本論の出発点になった。

その後、マーンダートリと摩訶迦葉の資料の他にも「半座」が言及される資料があれば考察に益すると思ひ、仏教文献については『大正新脩大藏經』テキストデータベース（SAT）および中華電子仏典協会（CBETA）の電子テキストを、*Mahābhārata* と *Rāmāyaṇa* については *The Machine-readable Text of the Mahaabhaarata, Based on the Poona Critical Edition, Produced by Muneo Tokunaga, Kyoto, Japan, Completed on November 14, 1991, The first revised version(V1): September 16, 1994, Upgrade version(1\_1): October 1, 1996* と *Machine-readable Text of the RaamaayaNa, produced by Muneo Tokunaga, Kyoto, Japan, March 12, 1993* を利用させていただくなどして資料の補充に努め、特に *Mahābhārata* については故上村勝彦先生の和訳を大変役立たせていただいた。

チベット訳資料やブラーフマナ、プラーナ等を概観できれば資料はもっと増えると予想されるが、それは担当執筆者の手にあまるので、はなはだ不完全ではあるが、【論文8】に合わせる形での刊行となった。

なおこの研究では原則として中国および日本撰述の典籍は無視した。この研究にとってはインドの文脈における「半座」の意味合いが重要であり、中国撰述の典籍を視野に含めると範囲が大きくなりすぎ、めざすものがはっきりしなくなると思われるからである。

しかしながら釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつ伝承については、末尾に【付録】として中国撰述の資料を挙げた。

## 【1】帝釈天が「半座を分かつ」伝承

[0] はじめに帝釈天が半座を分かつ伝承を紹介する。帝釈天から半座を提供された人物として、マーンダートリ、ニミ、*Mahābhārata* の英雄アルジュナがある<sup>(1)</sup>。

(1) 上に【0】 - 【2】で言及したカーリダーサなどの後世の詩人の手になる資料でのみ「半座」が言及される場合、以下の論考では用いないこととする。例えば *Śākuntala* のドウシュヤンタ王は、*Mahābhārata* の「シャクンタラー物語」では帝釈天から半座を提供されることはない。

[1] まずマーンダートリが帝釈天から半座を分かたれた伝承を紹介する。

[1-1] 「マーンダートリ（Skt. ; Māndhātṛ, Pāli ; Mandhātar）」とはある転輪王（Cakravartin, Cakkavattin）の名である。この王についてはヒンドゥー教と仏教の両方に

伝説があり、伝承には共通する部分とそれぞれに独自の部分も存する。

パーリ聖典では *AN.* 004-002-015 (vol. II p.017)、*Therīgāthā* のスメーター尼の偈 (vs. 486, 487)、*Apadāna* 04-02-017 (p.532)、*Jātaka* 258 の偈文部分に名前が言及されている。これらの記事はあまりに簡単であるため、マーンダートリの特徴がはっきりせず、帝釈天から半座を提供されることも述べられていない。しかし *AN.* と *Therīgāthā* は下に見る詳細な伝説の要素のうち「四洲の王」や「七宝 (*satta ratanāni*) または金銭 (*kahāpaṇa*) を雨と降らせる」ことにすでに言及し、マーンダートリが「諸欲を享受する者たちの第一人者である」とされている (1)。

ヒンドゥー教の伝承では、*Mahābhārata* (3.126 など) と諸プラーナにこの王にまつわる伝説が語られる (2)。

この王にまつわる伝説に関して、仏教とヒンドゥー教とで一致する点と相違する点とを明らかにすると、マーンダートリの誕生の仕方がヒンドゥー教文献と仏教文献の両方で父親から生まれたとする点では一致する。しかし父親の名は異なっており、ヒンドゥーでは *Yuvanāśva* とされ、その脇腹 (左右両方の伝承がある) から誕生する (3)。仏教では *Upoṣadha* (Pāli ; *Uposatha*) 王 (4) の頭にできた腫れ物から生まれる。このゆえに仏教文献においてのみ、彼には「頂生」 (*Mūrdhāta*) の別名があり、彼の誕生は四生のうちの胎生ではなく、湿生または化生とされる (5)。

名前の由来にも仏教とヒンドゥー教の間に関連が見出せる。ヒンドゥー教では帝釈天がマーンダートリの誕生の際にやってきて指をしゃぶらせ、「私の指を (*mām*) 吸いなさい (*√dhe*) 」と言ったこと (6)、仏教では乳母たちが子をとって「私の乳を吸いなさい」と言ったことが (7) 「マーンダートリ」の名前の由来とされる。命名のもととなる言葉を発した人物を帝釈天とするか乳母たちとするかで異なっているが、名前の通俗語源解釈は一致している。

*Mahābhārata* にはマーンダートリが 12 年間の早魃に際して雨を降らせたことが伝えられている (8)。これは仏教では金銭を雨と降らせたという伝承になって多少変化しているが、雨を降らせる神である帝釈天とマーンダートリとが深く関連づけられていることは重要である。上に見たマーンダートリの命名に際してヒンドゥー教の伝承で帝釈天がかかわることもそれを窺わせるが、仏教の伝承においてはマーンダートリの寿命が帝釈天と比較されて甚だしく長くされている (9)。

仏教文献においては、マーンダートリは釈迦族の祖先の王統中に加えられ、物語の筋はかなり定型化していてすべてほぼ以下の形である。

南閻浮提の王であるマーンダートリが、東勝身洲、西牛貨洲、北俱留洲に進軍して支配し、それでもあきたらず三十三天に昇る。四天王も彼と戦って退けることを望まず、帝釈天のところへ行かせる。帝釈天は彼を歓迎して半座を提供し、2人で天界を支配する。長い期間が過ぎた後、マーンダートリが帝釈天を滅ぼしてひとりで天界を支配しようという欲望をもつやいなや、地に落ちて命終する。そしてこれは釈尊の前生である。

この形はパーリでは *DN.-A.* (*Sumaṅgalavilāsini* vol. II p.481)、*MN.-A.* (*Papañcasūdanī* vol. I p.225)、*Jātaka-A.* 258 (vol. II p.310) に語られ、北伝の伝承のある程度まとまった記述としては、*Mūlasarvāstivādinaya Bhaiṣajyavastu* (*Nalina-*

ksha Dutt, *Gilgit Manuscripts*, vol. III part 1 p.092)、*Divyāvādāna* (Cowell 本 p.210)、『中阿含經』(大正 01 p.495 中)、『頂生王故事經』(大正 01 p.822 中)、『文陀竭王經』(大正 01 p.824 上)、『増一阿含經』(大正 02 p.583 中)、『六度集經』(大正 03 p.021 下)、『頂生王因縁經』(大正 03 p.393 上)、『賢愚經』「頂生王品」(大正 04 p.439 中)、『大宝積經』「菩薩見実会」(大正 11 p.429 下)、『父子合集經』(大正 11 p.974 上)、『大般涅槃經』40 卷本(大正 11 p.437 下)、『同』36 卷本(大正 11 p.679 中)、『根本有部律』「薬事」(大正 24 p.056 中)がある。

南伝においてはマーンダートリが閻浮洲の他の洲に行軍するのではなく、3つの洲から人々が到来するという筋になっている。また北伝には禅定を妨げた鳥たちから羽を奪った牟尼を追放する物語が挿入されるなど<sup>(10)</sup>、細部にはかなり異なりがあるものの、おおよその筋はどれも似通っている。そして帝釈天から半座を提供されるくだりは上記の資料にはもちろんのこと、その他の資料にも言及されている。

[1-2] マーンダートリは上記のような人物であるが、このマーンダートリが帝釈天から半座を譲られて、天界を2人で統治したことを伝える伝承には、以下のものがある。帝釈天とマーンダートリが座を共有して坐っている状況を描写する記事が以後の吟味に重要であるので、その点に留意して資料を紹介する。特に重要と思われる箇所を下線を付した。

(1) *Mahābhārata* (3.126.35)

citacaityo mahātejo dharmam prāpya ca puṣkalam /  
śakrasyārdhāsanaṃ rājaḥ labdhavān amitadyutiḥ // 35 //

王よ、靈廟を建設し(citacaitya)、偉大なる力を備え、無量なる光を備えた王は、多くの徳を獲得して、インドラ神の座の半分を獲得した。

(2) *Rāmāyaṇa* (7.59)

indrasya tu bhayaṃ tīvraṃ surāṇāṃ ca mahātmanām /  
māndhātari kṛtodyoge devalokajigīśayā // 7 //  
ardhāsanaena śakrasya rājyārdhena ca pārthivaḥ /  
vandyamānaḥ suragaṇaiḥ pratijñāṃ adhyarohata // 8 //

マーンダートリが天界を獲得しようと努力している時に、インドラと偉大な神々とに大きな恐怖があった。インドラの半座と王国の半分によって、王は神々の群れに敬われつつ誓いを立てた。

(3) *DN.-A.* (vol. II p.482) , *MN.-A.* (vol. I p.226) ; sakko : mandhātā āgato ti sutvā va tassa paccuggamaṇaṃ katvā : ‘svāgatan te mahārāja, sakan te mahārāja, anusāsa mahārājā’ ti vatvā, saddhiṃ nātakehi rajjaṃ dve bhāge katvā ekaṃ bhāgaṃ adāsi. rañño tāvatimśa-bhavane patiṭṭhitamattass’ eva manussa-bhāvo vigacchi, deva-bhāvo pātur ahoṣi. tassa kira sakkena saddhiṃ paṇḍu-kambala-silāyaṃ nisinnassa akkhi-nimesanamattena nānattaṃ paññāyati. taṃ asallakkhenta devā sakkassa ca tassa ca nānatte muyhanti.

帝釈天は「マーンダートリが来た」と聞いて、彼を迎えに出て、「善く来られた、大王よ、〔すべては〕陛下のものです。大王よ、命令してください」と言って、眷属<sup>(11)</sup>とともに王国を二分して、その一分を与えた。王が三十三天に住み着くやいなや

人間性が消えて神性が現れた。彼が帝釈天とともにパンドウカンバラ岩に坐った時に、眼のまばたきだけに違いが認められたそうだ。それに気がつかない神々は、帝釈天と彼との違いが分からなかった。

- (4) *Jātaka-A*. 258 ‘Mandhātu-j.’ (vol. II p.312) ; sakko māndhātuṃ tāvatimsabhavanam netvā devatā dve koṭṭhāse katvā attano rajjam majjhe bhinditvā adāsi. tato paṭṭhāya dve rājāno rajjam kāresuṃ.

帝釈天はマンドータルを三十三天に連れて行って、神々を二分し、自分の王国を真中で分けて与えた。それ以来、2人の王が国を治めた。

- (5) *Divyāvadāna* (Cowell 本 p.222) ; teṣāṃ eva devānāṃ sarvānte mūrdhātasya rājña āsanam prajñaptam. paścād devās trayastrimśā mūrdhātasya rājño ’rgham grhya pratyudgatāḥ. tatra ye puṇyamahesākhyāḥ sattvā anupūrveṇa praviṣṭāḥ. avaśiṣṭā vahiḥ sthitāḥ. yataḥ sa rājā mūrdhātaḥ saṃlakṣayati. yāny etāny āsanāni prajñaptakāny etebhyo yad antimam āsanam etaṃ mama bhaviṣyati. atha rājño mūrdhātasyaitad abhavad. aho vata me śakro devānām indro ’rdhāsanenopanimantrayet. saḥacittotpādād eva śakro devānām indro rājño māndhātur ardhāsānam adāt. praviṣṭo rājā mūrdhātaḥ śakrasya devānām indrasyaīrdhāsane. na khalu rājño mūrdhātasya śakrasya devānām indrasyaīkāsane niṣaṇṇayoḥ kaścīd viśeṣo vābhiprāyo vā nānākaraṇam vā yad utārohaparināhau varṇapuṣkalatā svaraguptyā svaragupter nānyatra śakrasya devānām indrasyaīnimiṣatena.

それらの神々の最後〔三十四番目〕に頂生王の座が設けられた。それから、三十三天の神々は頂生王に対する表敬の贈り物を持って会いに行った。そこで、福德故に偉大なる人たちは順次中に入り、残りの者たちは外に立っていた。そこで頂生王は考えた。「これらの設けられた諸々の座の末席が私の座なのか」。それから頂生王にこのような考えが浮かんだ。「ああ、帝釈天が私に半座を提供すべきだ」。そのように考えるやいなや、帝釈天がマーンダートリ王に半座を与えた。頂生王は帝釈天の半座に就いた。一つの座に坐る頂生王と帝釈天の2人の間にはいかなる違いもなかった。すなわち、背格好 (ārohaparināha)、皮膚の色合い (varṇapuṣkalatā)、声の質 (svaragupti) は〔まったく同じであった〕 (12)。帝釈天が瞬きしないということを除いて。

(Cowell 本 p.225) ; yasminn ānanda samaye rājā mūrdhāto devāṃs trayastrimśān adhirūḍha evaṃvidhaṃ cittam utpāditam, aho vata me śakro devānām indro ’rdhāsanenopanimantrayeta, kāśyapo bhikṣus tena kālena tena samayena śakro devānām indro babhūva. yasmin khalv ānanda samaye rājño mūrdhātasyaivaṃvidhaṃ cittam utpannaṃ yan nv ahaṃ śakraṃ devānām indram asmāt sthānās cyāvayitvā svayam eva devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca rājyaiśvaryādhipatyam karayeyam, kāśyapaḥ samyaksambuddhas tena kālena tena samayena śakro devānām indro babhūva.

アーナンダよ、三十三天に上った頂生王が「ああ、帝釈天が半座を私に提供するべきだ」と考えた時に、迦葉比丘がその時に帝釈天であった。アーナンダよ、頂生王に

「さあ私は帝釈天をこの地位からひきずり降ろして自分だけが神々と人間の王国の王の地位に君臨しよう」という思いが生じた時に、迦葉仏がその時の帝釈天であった。

(6) 『中阿含經』(大正 01 p.495 中) ; 彼頂生王即到三十三天。彼頂生王到三十三天已即入法堂。於是天帝釋便與頂生王半座令坐。彼頂生王即坐天帝釋半座。於是頂生王及天帝釋都無差別。光光無異。色色無異。形形無異。威儀禮節及其衣服亦無有異。唯眼眇異。……

(7) 『頂生王故事經』(大正 01 p.823 中) ; 爾時釋提桓因遙見頂生王來。見已便語頂生王曰。善來、大王、可就此座。爾時阿難。頂生王即就座而坐。與釋提桓因同坐。此二王同坐而無有異。顏容姿貌正等無異。唯眼眇異。……釋提桓因與頂生王半座使坐。二人同坐光色無異。顏彩容貌皆悉同一。唯眼眇異。

(8) 『文陀竭王經』(大正 01 p.824 下) ; 便前入天王釋宮。釋遙見文陀竭王來。便起迎之言。數聞功德欲相見日久。仁者來大善便牽與共坐。以半之座與文陀竭王。適坐左右顧視天上有玉女侍使。

(9) 『增一阿含經』(大正 02 p.584 中) ; 爾時天帝釋遙見頂生聖王來。便作是說。善來、大王、可就此坐。爾時阿難。頂生聖王即共釋提桓因一處坐。二人共坐不可分別。顏貌舉動言語聲響一而不異。

(10) 『六度集經』(大正 22 p.22 上) ; 入帝釋宮。釋覩王來。欣迎之曰。數服高名久欲相見。翔茲快乎。執手共坐。以半座坐之。王左右顧視。

(11) 『頂生王因緣經』(大正 03 p.403 上) ; 帝釋天主安處其上。餘諸天衆如次設座。最後安布頂生王座。爾時帝釋天主與諸天衆持闕伽軼餅、前起承迎彼頂生王。時頂生王大威德者依次而入。餘諸侍從各列于外。王乃惟忖。我今亦應處是座耶。又念帝釋天主若分半座命我同坐豈不快哉。佛言。大王。彼頂生王作是念時。帝釋即知乃分半座命其同坐。時頂生王與帝釋天主共處其座。大小身相容止威光音聲語言及莊嚴具悉無有別。唯王目瞬異於天主。……

(p.405 下) 昔於三十三天起念欲。其帝釋天主分于半座。是時迦葉苾芻方爲帝釋。又頂生王復起是念。若帝釋天主於此座中即謝世去。天上人間我爲王者豈不快哉。是時迦葉如來爲帝釋天主。

(12) 『仏本行集經』(大正 03 p.670 中) ; 我又曾作一轉輪王、名爲頂生、得四天下。復得帝釋半座而坐。以是果報、今得成於阿耨多羅三藐三菩提、乃至轉於無上法輪……

(p.752 中) 往昔有王名曰頂生。彼王已得統四天下、猶不知足、騰上至彼三十三天、得於帝釋半座而坐。以其內心不知足故、五欲境界便即失盡。……

(p.761 下) 往昔頂生聖王主 降伏四域飛金輪 復得帝釋半座居 忽起貪心便墮落

(13) 『仏所行讚』(大正 04 p.020 上) ; 曼陀轉輪王 王領四天下 帝釋分半坐 力不能王天……

(p.020 下) 曼陀轉輪王 普天雨黃金 王領四天下 復希切利天 帝釋分半座 欲圖致命終

*Buddhacarita* (11-13) ; devena vṛṣṭe 'pi hiraṇyavarṣe dvīpān samagrāṃś caturō 'pi jītvā / śakrasya cārdhāsanam apy avāpya māndhātur āsīd viṣayeṣv atrpṭiḥ //

黄金の雨が降っても、四洲をすべて征服しても、インドラの半座を得ても、マーン

ダートリは感官の対象に満足しなかった。

(14) 『中本起経』「大迦葉始来品」(大正 04 p.161 中) ; 過去久遠時有聖王、名文陀竭。高行暉世、功勳感動。切利天帝欽其異德、即遣車馬、詣闕迎王。王乘天車、忽然升虛。天帝出迎與王共坐、娛樂盡歡。送王還宮。佛告比丘。爾時天帝者大迦葉是也。文陀竭王者則是吾身。往昔天帝以生死畏座令吾並坐。吾今以無上正眞法御之座、報昔功德。佛說本昔<sup>(13)</sup>。

(15) 『賢愚経』「頂生王品」(大正 04 p.440 中) ; 帝釋尋出、與共相見、因請入宮、與共分坐。天帝人王貌類一種。其初見者不能分別。唯以視眴遲疾、知其異耳。王於天上受五欲樂。盡三十六帝。末後帝釋是大迦葉。

(16) 『大宝積経』「菩薩見実会」(大正 11 p.427 中) ; (無量称王) 爾時帝釋遙見無量稱王、歡喜來迎而作是言。善來、大王。即分半座命王令坐。王即就坐。在彼天上經無量歲。與彼天主分半而治。……

(p.429 上) (地天王) 爾時帝釋遙見地天大王、作如是言。善來、大王、善哉、大王。即分半座命王令坐。王即就坐。爾時地天在彼天上。經無量百千歲分位而治。……

(p.430 下) (頂生王) 爾時帝釋遙見頂生從遠而來、即出迦之、作如是言。善來、大王、善來至此。即分半座命王令坐。王即就座。時頂生王坐半座時、即有十種勝事映蔽諸天。何等爲十。一者壽命勝天。二者容色勝天。二者名稱勝天。四者受樂勝天。五者王領自在勝天。六者形貌勝天。七者音聲勝天。八者香氣勝天。九者食味勝天。十者細觸勝天。大王。爾時頂生與彼帝釋形容相貌行動威儀等無差別、飲食衣服資生之具悉無有異。唯有視瞬爲則異耳。

『父子合集経』(大正 11 p.972 下) ; (無邊称王) 彼帝釋天主即時遙見無邊稱王歡喜來迎而作是言。善來、大王。即分半座命王而坐。時無邊稱王即就其座、住於天上經無量歲。與彼天主分半同治。……

(p.973 下) (地天王) 時帝釋天主見地天王自遠而來、即起奉迎善言問訊、分座令坐命王同治。……

(p.974 中) (曼達多王) 時帝釋天主見曼達多王自遠而來、即出迎之作如是言。善來、大王、遠至於此。乃分半座命王同坐。曼達多王就彼坐時、有十種事勝彼天主。一者壽命。二者容儀。三者名稱。四者快樂。五者自在。六者端正。七者音聲。八者身香。九者食味。十者細觸。時曼達多王與彼天主形色受用悉皆相似。唯目瞬動爲其別也。

『大乘集菩薩学論』(大正 32 p.125 上) ; (如父子合集経云。……) 乃往過去無量世時、有轉輪王、名無量稱。威德名聞富貴自在。統四大洲獨爲尊勝。隨所意樂而得受用、一切林樹常有花果。時世人民安隱無惱。復能降雨衆妙香水金銀珍寶種種資具。諸有所須普皆充足。忽於一時昇切利天、帝釋天主分座令坐<sup>(14)</sup>。

(17) 『大般涅槃経』(40 卷) (大正 12 p.439 上) ; 於是天主釋提桓因知頂生王已來在外。即出迎逆見已執手、昇善法堂分座而坐。彼時二王形容相貌等無差別。唯有視眴爲別異耳。

『大般涅槃経』(36 卷) (大正 12 p.680 中) ; 於是天主釋提桓因知頂生王已來在外。即出迎逆見已執手、昇善法堂分座而坐。彼時二王形容相貌等無差別。唯有視眴爲別異耳。



(18) 『坐禪三昧經』(大正 15 p.270 上) ; 如華鬢枯朽 毀敗無所直 頂生王功德 共釋天王坐 報利福弘多 今日悉安在 此王天人中 欲樂具爲最 死時極苦痛 以此 可悟意 ……

(p.277 中) 如頂生王、雖雨七寶、王四天下、帝釋分座、猶不如足。

(19) 『正法念處經』(大正 17 p.164 上) ; 時頂生王到三十三天。爾時帝釋遊戲在於 一切樂林、娛樂受樂。遙見頂生、即分半座、命之令坐。爾時頂生即與帝釋共坐一床。

(20) 『根本有部律』「藥事」(大正 24 p.056 下) ; 其四大藥叉見此亦皆退走、並詣 四天王所、白言大王。今有四事大軍來至、我答皆被打退。告曰。此是曼陀多王有大福 德、欲來帝釋宮所。我等非可共敵。汝等共我將諸香花種種供具、於前迎之。見已存問、 即共往帝釋天宮。帝釋若見、即捨半座、分座而坐。

*Mūlasarvāstivādinayavastu, Bhaiṣajyavastu* (Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts*, vol. III part 1 p.095) ; tato rājā māndhātā cāturmahārājikān devān pratisaṃmodya devaiḥ parivṛto devāms trayastrīṃsān gataḥ. śakraṇa ca devendreṇārdhāsānenopanimantritaḥ.

それからマーンダートリ王は四大天王に挨拶し、神々に囲まれて三十三天に行つて、 帝釈天から半座を提供された。

(21) 『大智度論』(大正 25 p.172 下) ; 如頂生王、王四天下、天雨七寶及所須之物、 釋提婆那民分座與坐。雖有是福、然不能得道。

(22) 『阿毘達磨大毘婆沙論』(大正 27 p.519 下) ; 若能憶念曼駄多王與天帝釋共集 會事、能知四趣。

(23) 『鞞婆沙論』(大正 28 p.482 上) ; 於是頂生王、還從上下已、即於彼處立鑰婆、 極大供養已、更從餘處飛昇天上、共釋提桓因半座。

(1) AN. 004-002-015 (vol. II p.017) ; etadaggaṃ bhikkhave kāmabhogīnaṃ yadidaṃ rājā mandhātā. 「比丘らよ、諸欲を享受する者たちの第一人者はマーンダータル王である。」

*Therīgāthā* (vss. 486, 487) スメーダー尼の偈

cātuddīpo rājā mandhātā āsi kāmabhogīnaṃ aggo /

atitto kālaṅkato na c' assa paripūritā icchā // 486 //

satta ratanāni vasseyya vuṭṭhimā dasadisā samantena /

na c' atthi titti kāmānaṃ atittā 'va maranti narā // 487 //

四洲(を統べた) マンダータル王は諸欲を享受する者の第一人者であったが、満足することなく死んだ。彼の欲望は満たされなかった。

たとい十方の曇天が七宝をあまねく降らせても、諸欲が満たされることはない。人は、 けっして満足することなく死ぬ。

*Apadāna* (vol. II p.532)

mandhātādi-narindānaṃ yā mātā sā bhavaṇṇave /

nimuggā 'haṃ tayā putta tāritā bhavasāgarā. // 35 //

rañño-mātā mahesī ti sulabhan nāmaṃ itthināṃ /

buddhamātā ti yan nāmaṃ etam paramadullabhaṃ // 36 //

マーンダータルなどの王らの母は有の海に沈んだ。息子よ、私(マハーパジャーパティ) は汝によって有の海から救済された。

女にとって「王の母」、「王妃」という呼称は得やすい。「ブッダの母」という呼称は

もっとも得がたい。

*Jātaka* 258 (vol. II p.310) の偈文

yāvatā candimasūriyā (pariharanti) disā bhanti virocāmānā /  
sabbe va dāsā mandhātu ye pāṇā paṭhavissitā //  
na kahāpaṇavassena titti kāmesu vijjati / (*Dhammapada* vs.186)  
appassādā dukhā kāmā, iti viññāya paṇḍito //  
api dibbesu kāmesu ratim so nādhigacchati /  
taṇhakkhayarato hoti sammāsambuddhasāvako //

月と太陽が（運行し）、四方を照らしつつ輝く限りの大地に住む生類は、すべてマンダータルの下僕である。

カハーパナが雨と降っても諸欲が満たされることはない。賢者は、諸欲は喜びなく苦であると知る。

彼（マンダータル）は天界においても諸欲において楽を得ない。正等覚者の声聞は渴愛の滅尽を喜ぶ。

- (2) ヒンドゥー教の伝承におけるマーンダートリの概観は Vettam Mani, *Purāṇic Encyclopaedia* ‘MĀNDHĀTĀ’ の項目と菅沼晃編『インド神話伝説辞典』の「マーンダートリ」の項目に詳しい。
- (3) *Mahābhārata* 3.126.25 では左脇から、*Viṣṇupurāṇa* 4.2, *Bhāgavatapurāṇa* 9.6.30 では右脇。
- (4) 例外として *DN.-A.* (vol. I p.258)、*Suttanipāta-A.* (vol. I p.352) においてマンダータル王の父の名が *Varakalyāṇa* とされている。*Varakalyāṇa* は *Jātaka-A.* 258 の伝承ではマンダータルの祖父にあたる。
- (5) 『婆沙論』（大正 27 p.627 上）、『俱舍論』（大正 29 p.044 上）などには湿生の例として名が挙がるが、*Mahāvastu* (vol. I p.154) では化生 (*aupapāduka*) とされる。
- (6) *Mahābhārata* 3.126.28, *Viṣṇupurāṇa* 4.2.17, *Bhāgavatapurāṇa* 9.6.31.
- (7) *Mūlasarvāstivādinaya. Bhaiṣajyavastu* (Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts*, vol. III part 1 p.067,097), *Divyāvadāna* (Cowell 本 p.210)
- (8) *tena dvādaśavārṣikyām anāvṛṣṭyāṃ mahātmanā /  
vṛṣṭaṃ sasyavivṛddhyartham miṣato vajrapāṇinaḥ // 3.126.39*  
偉大なる彼は、十二年間続いた旱魃に際して、帝釈天が見ているにもかかわらず、穀物の豊作のために雨を降らせた。
- (9) 一例を挙げると *Jātaka-A.* 258 ではマーンダートリが天界に滞在している間にも 36 人の帝釈天が死にかわったとされる。
- (10) 『頂生王因縁経』（大正 03 p.393 下）、『根本有部律』「薬事」（大正 24 p.056 中）、*Bhaiṣajyavastu* (vol. III part 1 p.093), *Divyāvadāna* (Cowell 本 p.211)
- (11) 原文には ‘nāṭaka’（舞者）とあるが、‘nātaka’（眷族）に改めて読む。
- (12) *yad utārohapariṇāhau varṇapuṣkalatā svaraguptyā svaragupter.* この箇所はテキストに欠落が認められる。cf. Hisashi Mathumura, *Four Avadānas from the Gilgit Manuscripts* (Canberra: Dissertation), 1980, p.025.
- (13) 『中本起経』のこの伝承は名を「文陀竭」（マーンダートリ）とするものの、筋は以下に見るニミ王の物語の筋に一致する。
- (14) 『大宝積経』「菩薩見実会」とその異訳『父子合集経』では無量称王（無辺称王）、地天王、頂生（マーンダートリ）王の 3 人の物語につづいて、尼弥（ニミ）王の物語が語られる。前の 3 王がまったく同様の筋を有しているためここに挙げた。『大乘集菩薩学論』の記事は『父子合集経』の引用として無量称王の記事を載せている。

[2] 次にニミが帝釈天から半座を分かたれた伝承を紹介する。

[2-1] ニミ (Nimi または Nemiya) はマーンダートリと同様に、ヒンドゥー教文献と仏教文献の両方に名の挙がる転輪王である。ヒンドゥー教ではイクシュヴァークの息子とされ、ミティラー王朝の創始者とされる<sup>(1)</sup>。仏教文献ではマハーサンマタからはじまる釈迦族の系譜の中にマカーデーヴァの子孫として名が挙がり、*Dīpavaṃsa* (ed. by Hermann Oldenberg, London, 1879, p.028) では ‘Nemiya’、『起世経』(大正01 p.363下)、『起世因本経』(大正01 p.418下) では「尼寐王」とされ、『根本有部律』「破僧事」(大正24 p.101下)、『衆許摩訶帝経』(大正03 p.934下) では「彌王」とされている。ヒンドゥー教の伝承と同様に仏教文献でもニミはミティラーと関係が深い。

彼にまつわる伝説をマーンダートリのそれと比較した場合、大きく異なるのは、マーンダートリが天界に自ら赴くのに対し、ニミは帝釈天に招かれて天界に昇ることと、マーンダートリは天界で帝釈天から提供された半座に坐るだけではあきたらず、帝釈天を座からひきずり降ろして天界の王位を独占しようとするのに対し、ニミは帝釈天が申し出た天界における居住を慎んで断ることである。

[2-2] ニミが帝釈天から半座を分かたれる場面を中心に資料を紹介する。重要と思われる箇所を下線を付した。

(1) 『増一阿含経』050-004 (大正02 p.809下) ; 天帝及諸天子遙見王來。釋提桓因曰。善來、大王。命令共坐。佛語阿難。王便就天帝坐。王與帝釋貌相被服音聲一揆。諸天子心中念言。何者帝釋何者爲王。又復念曰。人法當眇而俱不眇。各懷愕然無以別之。天帝見諸天有疑心復念言。我當留王使住。然後乃寤耳。

(2) *Jātaka-A*. 541 ‘Nimi-j.’ (vol. VI p.127) ; sakko pi paṭinandittha vedehaṃ mithilaggahaṃ / nimantyayi ca kāmehi āsanena ca vāsavo // 571 //

帝釈天もヴィデー八国のミティラーに住む〔王〕を歓迎し、享樂と座とを提供した。

(3) 『六度集経』(大正03 p.049中) ; 帝釋自前。把臂共坐。南王容體、更變香潔、顏光端正、與釋無異。

(4) 『根本有部律』「藥事」(p.059上) ; 往時泥彌轉輪王。往三十三天。帝釋請分座而坐。受五欲樂。

*Mūlasarvāstivādinayavastu, Bhaiṣajyavastu* (Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts* vol. III part 1 p.112) ; nimir nāma rājābhūc cakravartī yo devāṃs trayastriṃśān gataḥ śakreṇa devendreṇārhdhāsanenopanimantrito divyaiś ca pañcabhiḥ kāmaguṇaiḥ samanvitaḥ samanvaṅgibhūtaḥ kṛḍitavān.

ニミという名の転輪王があり、彼は三十三天に行って帝釈天から半座を提供され、天界の5つの感官の対象を享受した。

(5) 『大宝積経』「菩薩見実会」(大正11 p.432中) ; 爾時尼彌王心不恐懼便昇堂上。爾時帝釋遙見尼彌王來、即作是言。善來、大王。便分半座命王令座。時尼彌王即就帝釋半座而坐。

『父子合集経』(大正11 p.975下) ; 時尼彌王容儀和悦身心不動。帝釋遙見即起

奉迎。善來、大王、遠屈威神無至疲極。乃分半座而奉彼王、共相慰問。王乃就坐。

[2-3] 上に紹介した資料の他にも、ニミにまつわる伝説を伝える資料が多く存在する。ただしここではニミが帝釈天から半座を分かたれるくだりが欠けている。それらを紹介するために、以下に上記資料の全体の内容とそれに対応する記事を概観する。

(1) の『増一阿含経』050-004 (大正02 p.806下) の粗筋は以下の通りである。

ミティラー城の大天<sup>(2)</sup> という転輪王に金輪が現れ、その輪が導くままに兵をひきいて東界、南界、西界、北界に赴き、その民を十善をもって導いて支配する。彼に転輪王の七宝(輪宝・象宝・馬宝・珠寶・女宝・主蔵宝・典兵宝)が出現する。大天王が天下を久しく治めた後、自身に一本の白髪を見つけ、長生という太子に国政を委ねて出家する。長生も大天と同様に白髪を見るまで四天下を支配し、冠髻という太子に国政を委ねる。同様にして八万四千代の転輪王が過ぎ去り最後の転輪王が荏(ニミ)王であった。

荏王は正法をもって国をおさめ、やがてその善政は帝釈天の賛嘆するところとなり、帝釈天は荏王に会うことを望み、窮鼻尼天女を使者として遣わしてから、侍御に命じて飛行馬車をミティラーに駆らせ荏王を三十三天に招く。荏王は招きに応じて国政を臣に委ね、馬車に乗る。侍御は悪道と善道のどちらを通して天界に赴くかをたずね、荏王がその両方を見たいと答えたため、侍御は両道の間を通して天界に向かう。帝釈天は「善來、大王」と言って荏王を迎えて、命じて共に坐らしめる。荏王は帝釈天の座に就いて荏王と帝釈天の間には相貌、被服、音声の違いがなく、諸天子はどちらが帝釈天でどちらが荏王かわからなくなった。人はまばたきするが、2人ともまばたきしないので区別がつかず、帝釈天が「私は王をここに留めて住ませようと思うが」と言ったことではじめて見分けがついた。帝釈天は荏王に天界に住まうことを勧めるが、荏王は白髪が生じたら出家するのが父王の命であることを理由に断る。荏王が天界にいたのは須臾の間であったが人間界では12年の歳月が過ぎていた。荏王は諸天子と別れて本国に帰ることを欲し、帝釈天は侍御に命じてミティラーまで送らせる。荏王は白髪を見つけると、善尽に国政を委ねて出家する。善尽は伝統をまもらず、七宝を失い、人民は短命になり、悪法が生じた。

大天王は釈尊の、荏王は阿難の、善尽はデーヴァダッタの前生である。

この『増一阿含経』050-004はMN. 083 ‘Makhādeva-s.’ (vol. II p.074)、『中阿含経』067「大天椽林経」(大正01 p.511下)の異本である。

MN. 083では王統をMakhādeva王—Makhādeva王の息子—8万4千人の王—Nimi王—Kaḷārajanakaという次第にする。ニミを天界に連れて行くのは帝釈天の御者であるマータリ(Mātali)である。帝釈天がニミとともに坐るくだりはない。マカーデーヴァは釈尊の前生であるが、その他の王が誰の前生であるかは言及されていない。

『中阿含経』067では、大天<sup>(2)</sup>—太子(名に言及なし)—8万4千の転輪王—尼弥(ニミ)となり、最後の伝統を絶えさせる王が言及されない。またここでも、尼弥王は「善來、大王。善來、大王。可與三十三天共住娛樂」と呼びかけられるのみで、帝釈天と共坐することはない。

(2) のJātaka-A. 541 (vol. VI p.095)ではMakhādeva—王子(名前に言及なし)—8万4千人に2人足りない転輪王—Nimi—Kaḷārajanakaという次第になっており、特にニ

ミがマータリの御するヴェージャヤンタ (Vejayanta) 車に乗って地獄と天界をくまなく観察するくだりが詳細に語られている。ここではニミは天界に到着して帝釈天から座を提供される。ただしそれがいかなる座であるか明記されていないため、『増一阿含経』のように帝釈天の座を得たのか否かは不明である。

また *Jātaka-A*. 009 ‘Makhādeva-j.’ (vol. II p.137) にもマカーデーヴァとニミのことが語られている。この2つの *Jātaka-A*. の記事ではマカーデーヴァ、ニミの両者がともに釈尊の前生であり、『増一阿含経』050-004、MN. 083、『中阿含経』067の伝承と異なっている。

(3) の『六度集経』(大正03 p.048下)には、摩調王から「千八十四世」を経た南(ニミ)王が摩婁(マータリ)という御者が駆る車に乗って天界に赴き、帝釈天は自らすすんで南王の臂をとって共に坐る。すると南王の容体は香潔になって、顔光端正にして帝釈天と違いがなくなった、とある。ここでは南王が釈尊の前生である。

(4) の『根本有部律』「薬事」(大正24 p.058中)では「中阿笈摩」に広説をゆずり、大天の記事に続けて泥弥多(Nimi)の物語が述べられる。泥弥多王は釈尊の前生であり、十三天において帝釈天から座を分かたれて、五欲楽を受けたとある。梵本 *Bhaiṣajyavastu* でも同様であり、大天(Mahādeva)の記事に続いてニミについて語られ、ここでもニミは帝釈天から座を提供される。

(5) の『大宝積経』「菩薩見実会」(大正11 p.432中)とその異訳『父子合集経』(大正11 p.975下)では無量称王(無辺称王)、地天王、頂生(マーンダートリ)王の3人の物語につづいて尼弥(ニミ)王の物語が語られる。前の3王が帝釈天の座について後に帝釈天を退けて独占しようと考えて地に落ちるのと好対照をなして、ニミは座を受けた後に仏の正法を護持するが故に閻浮提に帰る。

(1) Vettam Mani, *Purāṇic Encyclopaedia* ‘NIMI’の項目、菅沼晃編『インド神話伝説辞典』の「ニミ」の項目参照。

(2) 「大天」の原語としては、パーリでは‘Makhādeva’に統一されているが、*Bhaiṣajyavastu*に見出される‘Mahādeva’の方が相応しいと考えられる。

[3] 上に見たニミが帝釈天に招かれてマータリの御する戦車に乗って天界に行き、半座を提供されるくだりは、*Mahābhārata* (3.44)によく似た記事を見出せる。帝釈天がアルジュナに半座を提供する場面である。

パンドウの5王子の一人であるアルジュナが天界の御者であるマータリに招かれ、その御する戦車に乗って帝釈天のところへ武器をもらいに行く。道中アルジュナは、苦行によって天界を獲得した王仙、戦死した勇士たちが住む世界、帝釈天の乗象アイラーヴァタ、シッダやチャーラナの住む都、天女の群れの住むナンダナの森を見る。インドラの都アマラーヴァティーに入り、神々にたたえられつつ戦車から降りて帝釈天に歓待される。帝釈天は彼の両腕をとって、帝釈天の座に坐り、その傍らにアルジュナを坐らせる。帝釈天は、彼の頭に接吻し、恭しく頭を下げている彼を膝に乗せる。帝釈天の命令によってアルジュナは帝釈天の座に登った。第2の帝釈天のように<sup>(1)</sup>。

ここには「半座」‘ardhāsana’という語は用いられていないが、この場面は後にも語ら

れ、そこでは「半座」と表現されている<sup>(2)</sup>。「半座」とは2人の人物が並んで一つ座に坐るだけでなく、ひとりがもうひとりを膝にのせることをも意味するようである。

(1) 原文は以下の通り。

tataḥ śakrāsane puṇye devarājarṣipūjite /  
śakraḥ pāṇau gr̥hitvainam upāveśayad antike // 20 //  
mūrdhni cainam upāghrāya devendraḥ paravīrahā /  
aṅkam āropayām āsa praśrayāvanataṃ tadā // 21 //  
sahasrākṣaniyogāt sa pārthaḥ śakrāsanaṃ tadā /  
adhyakrāmad ameyātmā dvitīya iva vāsavaḥ // 22 //

それから帝釈天は彼（アルジュナ）の両腕をとって、神々と王仙に敬われる神聖な帝釈天の座において傍らに彼を坐らせた。

その時、彼の頭に接吻し、敵の勇士を殺す神々の王は、恭しく頭を下げている彼を膝にのせた。

その時、千眼者（帝釈天）の命令によって、プリターの子にして、限りなく偉大なアルジュナは帝釈天の座に登り、第2の帝釈天のようであった。

(2) sa sametya namaskṛtya devarājaṃ mahāmuniḥ /  
dadarśārdhāsanaḥ pāṇḍavaṃ vāsavaḥ ha // (3.45.10)

その大仙（ローマシャ）は神々の王（帝釈天）に会って敬礼し、帝釈天の半座を得ているパンドウの子（アルジュナ）を見た。

śakrasārdhāsanaḥ tatra me vismayo mahān /  
āsīt puruṣasārdhūla dṛṣṭvā pārthaṃ tathāgatam // (3.89.6)

最上の人（ユディシュティラ）よ、そこで、帝釈天の半座を得ているプリターの子（アルジュナ）がそのようであるのを見て、私（ローマシャ）には大きな驚きがあった。

dadāv ardhāsanaṃ prītaḥ śakro me dadatāṃ varaḥ /  
bahumānāc ca gātrāṇi pasparśa mama vāsavaḥ // (3.164.52)

与える者の最上者である帝釈天は喜んで私（アルジュナ）に半座を与えた。帝釈天は恭しく私の身体に触れた。

[4] 上に帝釈天が特定の人物に半座を提供する資料を見た。他にも、特定の人物ではなく、「このような人に帝釈天は半座を提供する」という意味合いの資料がある。

『大薩遮尼乾子所説経』と『正法念処経』には、転輪王は七宝を具足しているので四天下に王となり、帝釈天と座を分かつことができるとある<sup>(1)</sup>。

また仏頂系儀軌には、明呪の力で成就者が帝釈天から半座を分けられるほどになるといった意味合いの表現が数多くある<sup>(2)</sup>。

(1) 『大薩遮尼乾子所説経』（大正09 p.331下）；大王當知。轉輪聖王具足如是七寶用故、王四天下及諸龍王二種天王。謂四天下三十三天。共天帝釋分座而坐。以依離一瞋恨惡心不善業道。

『正法念処経』（大正17 p.009下）；如是輪王七寶具足王四天下。能與龍衆天衆同坐。天處有二四天王天三十三天。帝釋天王分座而坐。

(2) 『菩提場所説一頂輪王経』（大正19 p.208下）；帝釋大威德 若見成就者 分座而同坐及餘威德天……

(p.215上) 以身光照曜、一切成就者纔思惟一切悉皆成辦。所至帝釋處帝釋分與半座。無有與彼等。顏貌勇健智慧威德。無有等同者。……

(p.216 中) 帝釋與半座

『一字頂輪王經』(大正 19 p.239 中) ; 其天帝釋見是人來分座同坐。其諸大天亦皆分座。三界諸天見是人來。傲叛不起迎接敬虞、則皆頭破如蘭香枝。……

(p.254 上) 或處天帝釋宮分座同坐。顏貌威光精進智慧。一切天人無有匹者。……

(p.255 中) 是時呪者則得證爲劍仙、騰往須彌山頂。一切天見皆大驚怕伏爲伴從。是天帝釋分座同坐。隨至天宮位皆如是。

『五仏頂三昧陀羅尼經』(大正 19 p.274 下) ; 成此呪者怒目嗔喝一切天龍八部鬼神、皆得惶怖四散馳走。其天帝釋見是人來分座同坐。其諸大天亦皆分座。……

(p.281 中) 或處天帝釋宮分座同坐。身貌威光精進智慧。一切天人無有正者。

『一字寄特仏頂經』(大正 19 p.287 中) ; 若有持此大明王、我等所有一切天、見彼皆起分半座與坐。時世尊告天帝釋言。天帝法爾。成就頂輪者、天帝釋等諸天見者必分座。

(p.295 下) 於天阿脩羅鬪戰得無能勝。往於帝釋帝釋與半座。……

(p.298 中) 帝釋與半座爲大持明王。住一大劫。……

(p.298 下) 所去處於彼帝釋與半座。

## 【2】その他の「半座を分かつ」伝承

[0] 帝釈天とかかわりのない「半座を分かつ」伝承もある。以下にこれを紹介する。

[1] もっともよく知られているものとして『妙法蓮華經』「見寶塔品」に見られる宝塔中の多宝如来が釈迦牟尼仏に半座を分かちて二仏が共坐したというものがある (1) 。

(1) *Saddharmapuṇḍarīka* (南条・ケルン本 p.249) ; *atha khalu bhagavān prabhūtaratnas tathāgato 'rhan samyaksambuddho bhagavataḥ śākyamunes tathāgatasyārhatāḥ samyak-sambuddhasya tasminn eva siṃhāsane 'rdhāsanaṃ adāsīt tasyaiva mahāratnastūpābhyaṅtara evaṃ ca vadati, ihaiva bhagavān śākyamunis tathāgato niṣīdatu, atha khalu bhagavān śākyamunis tathāgatas tasminn ardhāsane niśasāda tenaiva tathāgatena sārddham.....*

その時、世尊・多宝 (Prabhūtaratna) 如来・応供・正等覚者は、世尊・釈迦牟尼如来・応供・正等覚者にその獅子座の座席の半分 (ardhāsana) を提供して、彼に巨大な宝塔の中で、このように言った。「世尊・シャーキヤ・ムニ如来はここにお坐りください」と。そこで世尊・釈迦牟尼如来は、かの如来と一緒に、その座席の半分に坐った。

『妙法蓮華經』(大正 09 p.033 下) ; 爾時多寶佛於寶塔中分半座與釋迦牟尼佛。而作是言。釋迦牟尼佛、可就此座。即時釋迦牟尼佛入其塔中、坐其半座結加趺坐。

『正法華經』(大正 09 p.104 上) ; 時多寶佛則以半座與釋迦文、七寶寺中有聲出曰。釋迦文佛、願坐此床。釋迦文佛輒如其言。時二如来共同一處。

『添品妙法蓮華經』(大正 09 p.168 上) ; 爾時多寶佛於寶塔中分半座與釋迦牟尼佛。而作是言。釋迦牟尼佛、可就此座。即時釋迦牟尼佛入其塔中、坐其半座結加趺坐。

その他、これに関連する記事として以下のものが見出される。

『思惟略要法』(大正 15 p.300 中) 正憶念法華經者、當念釋迦牟尼佛於耆闍崛山與多寶佛在七寶塔共坐。

『就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』(大正 19 p.595 中) ; 當中内院畫八葉蓮華。於華胎上置窺波塔。於其塔中、畫釋迦牟尼如来多寶如来同座而坐。

(大正 19 p.597 下) ; 釋迦牟尼如来及多寶佛。於其塔中同座而坐。

『法華曼荼羅威儀形色法經』（大正 19 p.602 中）；爾時塔中師子座上、釋迦多寶兩足聖尊半跏半座、而各同坐。

[2] その他、『仏本行集經』（大正 03 p.757 上）には釈尊がまだ菩薩であった時にその下で修行をしたアーラーラ・カーラーマが、菩薩に「半座」を分与して弟子たちを 2 人で教導することを申し出たとある (1)。

(1) 『仏本行集經』（大正 03 p.757 上）；瞿曇今可共我同心。我等二人領此大衆、教化顯示。是時羅邏、雖名爲師、但取菩薩平等行分。自以半座、分與菩薩、供養菩薩。

[3] また『賢愚經』「優波鞠提品」（大正 04 p.443 上）には優波鞠提（ウバグプタ）の説法を聞いていた狗が命終して第六天に生まれ、魔波旬（他化自在天）と共に一床に坐したとある (1)。

(1) 『賢愚經』（大正 04 p.443 上）；有一狗子日日於耳竊爲説法。其狗命終、生第六天與魔波旬共坐一床。魔王思惟。此天大徳、乃與我等。

[4] *Mahābhārata* においてアルジュナが帝釈天から半座を提供されたことはすでに見たが、(5.58) においてアルジュナはクリシュナとも座を共有している。

[4-1] クリシュナとアルジュナに会ってきたサンジャヤが、ドリタラーシュトラにその様子を語る中に次のようにある。

黄金の大きな座席に 2 人の勇士が坐っていた（第 6 偈）。クリシュナの両足がアルジュナの両膝にのせられていた……（第 7 偈）。……背の高い 2 人の若者が一つの座席に坐っているのを見た（第 10 偈） (1)。

[4-2] このサンジャヤのドリタラーシュトラへの報告は *Mahābhārata* の冒頭にある全体の要約を語る部分で、「翌日にサンジャヤは諸王の集会において、主君にヴァースデーヴァ（クリシュナ）とアルジュナの一体なること (*ekātmya*) を語った」（1.2.144） (2) とまとめられている。第 5 巻のサンジャヤの報告はかなり長文であるので（第 46-68 章上村勝彦訳『マハーバーラタ 5』pp.172-227）、どの部分が「クリシュナとアルジュナの一体なる」ことを語っているのか明確ではないが、恐らくは上記のアルジュナとクリシュナが一つ座に坐っている場面が 2 人の「一体なること」を述べているのであろう。

(1) 原文は以下の通り。

naikaratnavicitraṃ tu kāñcanaṃ mahad āsanam /  
vividhāstaraṇāstīrṇaṃ yatrāsātām arimdamau // 6 //

多くの宝石で色とりどりの黄金の大きな座が種々の敷物をかけられてあり、そこに敵を制する 2 人（アルジュナとクリシュナ）が坐っていた。

arjunotsaṅgagau pādaḥ keśavyopalakṣaye /  
arjunasya ca kṛṣṇāyāṃ satyāyāṃ ca mahātmanaḥ // 7 //

アルジュナの両膝にクリシュナの両足がのっているのを私（サンジャヤ）は見た。（以下、意味不明。）

śyāmau bṛhantau taruṇau śālaskandhāv ivodgatau /  
ekāsanagatau dṛṣṭvā bhayaṃ māṃ mahad āviśat // 10 //

肌が黒く、大きくて、シャーラ樹の幹のように背の高い 2 人の若者が一つ座に坐っているの



を見て私に大きな恐怖が入り込んだ。

(2) 原文は以下の通り。

prabhāte rājasamitau saṃjayo yatra cābhibhoḥ /  
ekātmyaṃ vāsudevasya proktavān arjunasya ca // 144 //

### 【3】「半座を分かつ」伝承の意味

[0] 以上、インドの各種文献に見られる「半座を分かつ」伝承を見てきた。この意味する所を簡単に見ておきたい。

[1] まず半座を分かつという行為が行われる条件の一つとしては、半座を分かつ者と分かたれる者の容姿が等しいということが挙げられる。

帝釈天がマーンダートリに半座を分かったことを記す記事を【1】 - [1-2] に紹介したが、注目すべき点は、(3) *DN.-A.*と*MN.-A.*、(5) *Divyāvadāna*、(6) 『中阿含経』、(7) 『頂生王故事経』、(9) 『増一阿含経』、(11) 『頂生王因縁経』、(15) 『賢愚経』、(16) 『大宝積経』『父子合集経』、(17) 『大般涅槃経』において、帝釈天とマーンダートリが一つ座に坐った時に、2人の容貌が等しく、マーンダートリがまばたきをする(神はまばたきしない)こと以外に違いがなかったとされていることである。この中には声や衣服・荘厳具などの身に着けるものまで等しいとするものもある。

ここから「半座を分かつ」という行為が意味するところは、半座を提供する者と提供される者とは容姿が等しい、または半座を共有する2人の容姿が等しくなるということであろうと考えられる。

このことは【1】 - [2-2] に紹介した(1) 『増一阿含経』050-004、(3) 『六度集経』の帝釈天がニミに半座を分かつ場面においても確認できる。ただしニミについては帝釈天からの半座の提供がマーンダートリの伝説ほどには一般的ではなく、マーンダートリの伝説がニミの伝説に影響を与えたこともあり得る。

帝釈天にかかわりが無いものでも【2】 - [1] に紹介した『妙法蓮華経』の二仏共坐が重要である。多宝如来と釈尊の関係はどのようなものであるか、『法華経』の門外漢である筆者には言及が憚られるが、仏と仏であるから容姿の点で三十二相八十種好によって同一であると考えられよう。

[2] 次に「半座を分かつ」ことは、権力を二分することを、すなわち半座を共有する2人が同等の権限・地位を共有することを表すと考えられる。

帝釈天がマーンダートリに半座を分かったとする資料の中、【1】 - [1-2] の(2) *Rāmāyaṇa*、(3) *DN.-A.*と*MN.-A.*では、半座を分かつことが王国を二分することと併記されている。(4) *Jātaka-A.* 258には王国を二分することのみあって「半座」への言及がないが(3)と同様に解釈できるものと考えられる。ここから半座を分かつことが国を分かつことと同義であることが伺える。(2) (3) (4) 以外の資料も帝釈天とマーンダートリが2

人で天界を支配した、つまり共同で統治したことを伝えている。半座を分かつ者と分かたれる者は同等の権限・地位を有すると考えられる。

[3] 最後に「半座を分かつ」ことは半座を分かつ者と分かたれる者とは、等しい容姿や同等の権限も含めて何もかも等しくて同一であり、能力も等しいことを示していると考えられる。

*Mahābhārata* から紹介した【1】 - [3] の帝釈天がアルジュナに半座を提供する記事は、「第2の帝釈天」という表現から知られるように、アルジュナと帝釈天とが等しいことを示していると考えられる。アルジュナが「インドラの息子」(aindri, śakraja, śakranandana, śakrasūnu, indrasuta, indrātmaja) という別名をもつことも考慮する必要がある。

[2] - [4] に紹介したアルジュナとクリシュナの場合、どちらがどちらに座を提供したのか記されていないが、これもアルジュナとクリシュナが「一体なること」(ekātmya) を示す表現であることがほぼ確認できる。

『法華経』の二仏共坐もこの推測を支持すると考えられる。

マーンダートリについても、*Mahābhārata* において帝釈天と同様に雨を降らす能力(仏教の伝承では七宝や金銭の雨を降らす能力)が付与されており、これが帝釈天の能力と一致することで、マーンダートリに帝釈天の半座を獲得する資格が与えられるのであろう。また上に見た容姿が等しくなることを示す資料において声や衣服まで等しいことに言及するものは、なにもかも等しいことを強調していると考えられる。

[4] ここでマーンダートリと摩訶迦葉の関連について付言しておく。【1】 - [1-2] の(5) *Divyāvadāna*、(14) 『中本起経』、(15) 『賢愚経』ではマーンダートリは釈尊の前生であり、マーンダートリに半座を分かった帝釈天は摩訶迦葉の前生であったとされる。特に(14)は釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったのは、前生において帝釈天であった摩訶迦葉から半座を提供されたことに報いるためであったとする。

#### 【4】 釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承

[0] 釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったという伝承はパーリ文献には見当たらないが、漢・梵の北伝資料の処々に散在している。摩訶迦葉の諸徳を列挙する中に簡単に「半座」が言及される場合や、どのような状況で釈尊から摩訶迦葉に半座が勧められたかを記述する場合もあり、「半座」は種々の文脈で言及されるため、どのような文脈で言及されているかに留意して分類しながら、資料を紹介し考察する。以下、《 》〈 〉内の数字は【論文8】「摩訶迦葉(Mahākassapa)の研究」に用いられている資料番号である。半座に言及する箇所には下線を付した。

[1] 諸比丘が摩訶迦葉をあなどったため、釈尊が摩訶迦葉に半座を与えて彼が自身と同じ禪定を得ていることを称賛する。

- (1) 『雑阿含經』1142 (大正 02 p.302 上) 〈12-3〉 ; 爾時世尊知諸比丘心之所念。告摩訶迦葉。善來、迦葉、於此半座。我今竟知。誰先出家。汝耶、我耶。……爾時尊者摩訶迦葉合掌白佛言。世尊。佛是我師。我是弟子。佛告迦葉。如是如是。我爲大師。汝是弟子。汝今且坐。隨其所安。尊者摩訶迦葉稽首佛足。退坐一面。
- (2) 『別訳雑阿含經』117 (大正 02 p.416 下) 〈12-4〉 ; 爾時世尊。……遙見迦葉。即語之言。善來、迦葉。尋分半座。命令共坐。我當思惟。汝先出家。我後出家。是故命汝。與爾分座。摩訶迦葉聞斯教已。即懷惶悚。便起合掌。頂禮佛足。白佛言。世尊。是我大師。我是弟子。云何與師同共同坐。第二第三。亦作是言。佛告迦葉。實如汝言。我是汝師。汝是弟子。即命迦葉。汝可於彼所應坐處。於中而坐。時尊者迦葉。即奉佛教。敷座而坐。
- (3) 『中本起經』「大迦葉始來品」(大正 04 p.161 上) ; 於是摩訶迦葉。垂髮弊衣。始來詣佛。世尊遙見歎言。善來、迦葉。豫分半床。命令就坐。迦葉進前。頭面作禮。退跪自陳曰。余是如來末行弟子。顧命分坐。不敢承旨。

[1-1] (1) (2) の 2 經に対応するパーリの經は SN. 016-009 (vol. II p.210) 〈12-1〉であるが、ここには釈尊が摩訶迦葉に半座を勧めるくだりは言及されておらず、釈尊によって説かれる摩訶迦葉が自身と同じく四禪・四無色定・想受滅・六神通を得ていると稱賛する言葉のみが対応している。

釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつたという伝承の原型は、おそらくここに見られる伝承であると考えられる。他の伝承はこのような伝承を基にして成立したのであろう。パーリの対応經に言及されないことから、摩訶迦葉に半座を分かつたという伝承そのものは我々の資料観からすると第 1 次水準資料ではなく、第 3 次水準資料に属する (1)。

[1-2] ちなみに摩訶迦葉が釈尊の分かつた半座に実際に坐つたか、それともそれを辞退したかはあまり明確ではない。多くの資料は釈尊が摩訶迦葉に「半座」を「請」じたとするのみで、実際に坐る場面が記述されていないからである。しかしながら摩訶迦葉がその座に坐ることを辞退したことが明確な伝承も存在する。上記の『雑阿含經』と『別訳雑阿含經』の資料では摩訶迦葉は釈尊の分かつた座には坐っていない。

(1) 【論文 8】【1】 - [3]

[2] トウツラティッサー (またはトウツラナンダー) から誹謗を受けた摩訶迦葉が阿難に対して自身が釈尊から受けた稱賛を述べる中に、釈尊から半座を分かたれたことが言及される。

- (1) 『雑阿含經』1143 (大正 02 p.302 下) 〈13-2〉 ; 如是阿難。世尊如來應等正覺、於無量大衆中、口自説言。善來、摩訶迦葉、請汝半座。

[2-1] 『別訳雑阿含經』118 (大正 02 p.417 上) 〈13-3〉はこの經に内容的に対応しているが、半座には言及していない。パーリでは SN. 016-010 (vol. II p.214) が対応しているが、半座への言及はない。

この『雑阿含經』1143 に半座が言及されるのは、『雑阿含經』1142 を前提にしていると考えられる。

[3] 摩訶迦葉が結集に際して阿難に四部阿含を後世に残すことを委託するが、阿難は如来が在世に半座を請うた摩訶迦葉こそがその任に堪えると訴える。

- (1) 『増一阿含経』(大正 02 p.549 下) ; 如来在世請半坐
- (2) 『分別功德論』(大正 25 p.031 中) ; 阿難推先迦葉云、耆年堪任爲衆演法。所以然者。尊長舊學多識世尊所委。爲將來衆生故。欲使正法久存於世。是以如来半坐相命。仁尊既是衆僧上座。又復智慧包博。唯垂慈愍時宣法寶。

[3-1] (1) は『増一阿含経』の序品の記事である。(2) は『増一阿含経』の註釈であり、阿難が摩訶迦葉を推した理由として、摩訶迦葉は尊長・旧学・多識・世尊の委ねる所であり、釈尊が将来の衆生のために正法を世に久しく存せしめようと欲して、半座を命じたほどの衆僧の上座であるから、という。

[4] アショーカ王がウパグプタ長老の勧めで、釈尊の仏塔からはじめて諸仏弟子の塔を供養する。その中、摩訶迦葉の塔のところでウパグプタ長老が摩訶迦葉の諸徳を数え上げる。

- (1) 『雑阿含経』604(大正 02 161 中) 〈12-2〉 ; (p.168 上) 次復示摩訶迦葉塔。語王言。此是摩訶迦葉塔。應當供養。王問曰。彼有何功德。答曰。彼少欲知足。頭陀第一。如来施以半座及僧伽梨衣。愍念衆生興立正法。即説偈曰  
功德田第一 愍念貧窮類 著佛僧伽梨  
能建於正法 彼有如是徳 誰能具宣説  
時王捨十萬兩珍寶。供養是塔。以偈讚曰  
常樂於寂靜 依止林藪間 少欲知足富 今禮大迦葉

- (2) *Divyāvadāna* Kunālavādāna (Cowell 本 p.395)

yāvat sthaviropaguptaḥ sthaviramahākāśyapasya stūpaṃ kriyatām asyārcanam iti. rājāha. ke tasya guṇā babhūvuḥ. sthavira uvāca. sa hi mahātmā alpeccānāṃ saṃtuṣṭānāṃ dhūtaguṇavādināṃ agro nirdiṣṭo bhagavatārdhāsānenopanimantritaḥ śvetacivareṇācchādito dīnāturagrāhako śāsanasamdhārakaś ceti. āha ca. puṇyākṣetram udāraṃ dīnāturagrāhako nirāyāsaḥ. sarvajñacivaradharaḥ śāsanasamdhārako matimān.

kas tasya guror manujo vaktuṃ śakto guṇān niravaśeśān. āsanavarasya sumatir yasya jino dattavān ardhā. tato rājāsokaḥ sthaviramahākāśyapasya stūpe śatasahasraṃ dattvā kṛtāñjalir uvāca. parvataguhānilayam araṇyaṃ vairaparāṇmukhaṃ praśamayuktam santoṣaguṇavivṛddhaṃ vande khalu kāśyapaṃ sthaviram.

ウパグプタ長老が「摩訶迦葉長老のストゥーパを敬ってください」と〔言う、アショーカ〕王は言った。「彼にはどのような特性があったのですか」。長老が答えた。「彼は偉大で少欲で満足して頭陀行者である者たちの第一人者であると示され、世尊によって半座を提供されました。〔釈尊からいただいた〕輝く(白い?)衣をまとい、貧苦にあえぐ者を攝取し、教説を保つ方でもありました」。さらに言った。「広大な福田、貧苦にあえぐ者の攝取者であり、心持の良い(?)方でもありました。一切智者の衣を保持し、教説を保ち、智慧がありました。かの師(迦葉)の徳を全て言い尽くせる人は誰もいません。なぜなら妙なる智慧を有する勝者が最上の座の半分を与える

ほどの人でしたから」。それからアショーカ王は摩訶迦葉長老のストゥーパに百千金を施与して、合掌しつつ言った。「山窟に住み、いさかいを離れ、不和に背をむけ、寂靜に専心した、知足の徳によって偉大なる迦葉長老を私は敬う」。

- (3) 『阿育王伝』(大正 50 p.104 中) ; 遂復示王迦葉之塔。舉手而言。此是摩訶迦葉之塔。亦應供養。王問言曰。有何功德。尊者答言。少欲知足頭陀第一。如來分坐而與令坐。佛自脱衣以與迦葉。憐愍窮苦護持佛法。今為略說。豈能盡其苦行功德。王以百千兩金施迦葉塔。即便合掌而作偈言

坐於山窟 去除鬪諍 無諸忿怒 常行禪定  
少欲知足 功德最上 我今頂禮 至心歸命

- (4) 『阿育王經』(大正 50 p.138 中) ; 優波笈多復指示言。此是摩訶迦葉塔應當供養。阿育王問言。其人功德云何。長老答言。於少欲知足乃至八種及頭陀苦行、佛說其人最為第一。佛以半座與其令坐。又以自身袈裟覆之。攝受苦人受持法藏。復說偈言

最勝大福田 行少欲知足 受持佛法藏 能攝苦衆生  
佛與其半座 及以衣覆身 無有人能說 其大功德海

時阿育王復以十萬金。供養大迦葉塔。合掌說偈

常在山石窟 具少欲知足 除諸煩惱怨  
獲得解脫果 無比功德力 是故今頂禮

これら 4 資料はすべて対応関係にあり (1)、摩訶迦葉の特性を列挙する中に「半座」が言及される。

- (1) 同様の記事が『釈迦譜』(大正 50 p.079 下)に見られる。「次復示摩訶迦葉塔語王言。此是摩訶迦葉禪窟。應當供養。王問曰。彼有何功德。答曰彼少欲知足頭陀第一。如來施以半座及僧伽梨衣。愍念衆生興立正法。時王捨十萬兩珍寶。供養是塔」

[5] 給孤独長者の娘スマーガダーが摩訶迦葉の特性を列挙する。

給孤独長者の娘スマーガダーが、外道の信者である家に嫁ぎ、後に家族を仏教に帰信させて釈尊と仏弟子を家に招く。空中を飛んでやってくる一人一人の仏弟子をスマーガダーが夫に紹介していく中、摩訶迦葉のところで半座が言及される。

- (1) 『増一阿含経』(大正 02 p.663 上) 〈18-3〉 ; 是時尊者大迦葉、化作五百匹馬皆朱毛尾金銀校飾、在上而坐、並雨天華、往詣彼城。長者遙見以偈問女曰

金馬朱毛尾 其數有五百 爲是轉輪王 爲是汝師耶  
女復以偈報曰

頭陀行第一 恒愍貧窮者 如來與半坐 最大迦葉是  
是時大迦葉遠城三匝、往詣長者家。

- (2) *Sumāgadhāvadāna* (岩本裕『『スマーガダー=アヴァダーナ』研究』 仏教説話研究 第五卷 開明書院 1979年; 付録 I 校訂梵本『スマーガダー=アヴァダーナ』)

59. atrāntareṇāyuṣmān mahākāśyapaḥ sauvarṇaṃ parvatam abhinirmāya nānāmṛgagaṇopetaṃ nānāprasravākulaṃ nānāpakṣigaṇākīrṇaṃ nānāvṛkṣopaśobhitaṃ tatropaviṣṭaḥ sa upari vihāyasā ṛddhyākāśenāgacchati.

60. taṃ dṛṣṭvā sumāgadhāyāḥ svāmī sumāgadhāṃ papraccha: sumāgadhe, ayaṃ

te sa śāstā yo 'yaṃ suvarṇaṃ parvatam abhiruhyāgacchati.

61. sā kathayati: nāyam āryo mahākāśyapo, 'yaṃ bhagavatā alpeccānāṃ samtuṣṭānāṃ dhūtaguṇadharaṇāṃ agro nirdiṣṭaḥ.

62. anenaikonāṃ lāṅgalasahasraṃ lakṣāhatānāṃ, ṣaṣṭihiraṇyakotyaḥ sauvarṇānāṃ, yavānāṃ aśitibhiḥ khāryaṃ, ṣoḍaśa dāsagrāmam, aṣṭādaśa mahābhaktagrāmāḥ, anekaśatasahasrāṇi vastūny upakaraṇaṃ samutsrjya pravrajitaḥ.

63. punar aparaṃ: sarvaśrāvākānāṃ samakṣam ayaṃ bhagavatārdhāsanenopanimantritaḥ

ekaprasthodanaṃ śreyaḥ ekaśayyā sukhāvahā /

ekadūṣyayugaṃ vāryaṃ, geho mohaparigrahaḥ //

iti kṛtvāpratigṛhitāśeṣā yā aparigraha iti na gṛhitaḥ. yaś ca bhāgineyāṃ abhirūpāṃ darśaniyāṃ janapadakalyāṇisadrśiṃ tām apahāya pravrajitaḥ, sa eṣāgacchati.

59. その時、長老摩訶迦葉が種々の獣の群れが棲み、種々の泉が湧き、種々の鳥の群れが飛びかい、種々の樹々に彩られた黄金の山を化作して、その山の上空に坐り、神通力によって空中を飛んでやって来た。

60. 彼を見て、スマーガダーの夫がスマーガダーに「スマーガダーよ、黄金の山に乗って来られたこの方が、汝の師か」と訊ねた。

61. 彼女は答えた。「いいえ、この方は摩訶迦葉聖者です。世尊はこの方を少欲知足の頭陀行者たちの第一人者であると宣言されました。

62. この方は、刻印を打った999本の鋤、黄金六億金と、大麦80カーリーと、16の奴隷村と18の大きな食糧村と、幾百千の高価な物と資具とを捨てて出家しました」。

63. さらにまた、「すべての声聞たちの眼前でこの方は世尊から座席の半分を提供されました。

『1 プラスタの粥で十分、一寝床が安眠をもたらし、一對の衣が宝である。家は迷いの住処』

と考えて、受け取らなかったものはすべて、『〔これは〕受け取ったものではない』と行って取りませんでした。国中で第一の美女にも似た可愛らしくて美しく見目麗しい女を捨てて出家した方が来られたのです」。

(3) 『須摩提女経』（大正02 p.841上）；是時尊者大迦葉、化作五百匹馬皆朱毛尾金銀交飾、在上坐、並雨天華、往詣彼城。長者遙見已以偈問女曰

金馬朱毛尾 其數有五百 爲是轉輪王 爲是汝師耶

女復以偈報曰

頭陀行第一 恒愍貧窮者 如來與半坐 最大迦葉是

是時大迦葉繞城三匝往詣長者家。

(4) 『給孤長者女得度因緣経』（大正02 p.847下）；復次尊者大迦葉、化大金山、其色晃耀。復有種種樹林飛鳥周匝圍繞。而此尊者處于山頂現是神通。從空而來三繞彼城。次從空下入長者舍。爾時長者見是相已、問善無毒女言。今此所來處金山頂、現如是相入此舍者、是汝師邪。女即答言。此非我師。是佛弟子名大迦葉。此人未出家時其家大

富、金銀珍寶其數無量、有百千種上妙衣服、眷屬熾盛人所瞻敬。此人厭捨如是富貴等事、出家修道而獲果證。又此尊者常止一處、常持一衣少欲知足。而能攝餘貪愛衆生。又此尊者、佛於一時分半座令坐。佛說此人修頭陀行中最爲第一。是此尊者次第而來。

[6] 釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったことの因縁を前生に求めるものとして以下のものがある。

- (1) 『中本起経』「大迦葉始来品」（大正04 p.161上）；【1】 - [1-2] - (14) 参照。
- (2) 『衆経撰雜譬喻』（大正04 p.542中）；帝釈天が梵天と組んで人々を教化する。帝釈天は人間がみな悪道に落ちてしまつて天界に昇つて来ないために天界の人口が減ることを憂える。帝釈天は人間界に行つて獅子になり、梵天はバラモンになる。獅子が人を喰らうと言つて人々を恐れさせると、バラモンが王に進言して死刑囚を犠牲にさせる。獅子は死刑囚を連れて深山中に行くが彼らを食わずに五戒・十善道を教える。このようにして八万諸国を教化して天界の人口が増える。この時の帝釈天は釈尊の前生で、バラモンは摩訶迦葉の前生である。摩訶迦葉の前生である梵天の助けで釈尊は仏果を得た。この時の恩に報いるために並坐させた（趣意）。

[7] 釈尊が摩訶迦葉に半座を分かった理由について4説を挙げるものがある。

- (1) 『尊婆須蜜菩薩所集論』（大正28 p.762上）；是謂、彼時以何等世尊請摩訶迦葉與半座坐。
  - ①或作是説。時諸比丘輕易迦葉起染汚心、不知迦葉入大法要。以是故世尊與半座坐。欲使比丘心開意解。懼獲不善報。
  - ②或作是説。彼尊者有種種功德。世尊先所化。恐諸比丘犯禁戒罪。
  - ③或作是説。第一尊重尊者阿那律。世尊往視依衣。更請摩訶迦葉與半座。
  - ④或作是説。世尊欲付授戒律。後來衆生信受其言。

[7-1] ①は[1]の『雜阿含經』1142、『別訳雜阿含經』117の記事に対応する。諸比丘が摩訶迦葉を軽んじて悪報を受けることがないようにした、②は釈尊に先に教化されて法臘が上である摩訶迦葉を、法臘が下の諸比丘が軽んじて犯戒することがないようにした、③は摩訶迦葉がぼろぼろの衣をつけて現れたために、本来摩訶迦葉よりも尊重されてはならない阿那律が第一に尊重されているのを釈尊が見て、半座を分かつことで摩訶迦葉が第一に尊重されるようにした、④は〔摩訶迦葉に？〕戒と律を授けて後來の衆生が摩訶迦葉の言葉を信受するようにした、という意であろう。

[8] その他、上の分類のどれにも属さないものを紹介しておく。

- (1) 『大莊嚴論經』（大正04 p.310中）；復次有大功德猶修無倦。況無福者而當懈怠。我昔曾聞。尊者摩訶迦葉、入諸禪定解脫三昧。欲使修福衆生下善種子獲福無量。於其晨朝著佛所與僧伽梨衣、而往乞食。時有覩者。即説偈言  
讚歎彼勝者 著於如來衣 人天八部前 佛分座令坐
- (2) 『華手經』（大正16 p.127中）；爾時世尊遙命之曰。善來、迦葉、久乃相見。汝當就此如來半坐。佛移身時、大千世界六種震動、有大光明遍照世界、大音普聞如擊金

鍾。摩訶迦葉偏袒右肩、右膝著地長跪合掌白世尊曰。佛是大師。我爲弟子。佛之所有衣鉢坐處。爲弟子法不應受用。……

(p.128 上) 我於帝釋石室中住。承世尊命故來到此。欲於佛法請質所疑。而今如來顧命分坐。大千世界六種震動。我即惟曰如來希有。成就甚深清淨大法。自然無師成無上道。住大慈悲摧躁憍慢幢。今乃顧命弟子分坐。如貧賤人以尊敬心見轉輪王。時轉輪王命之共坐。是貧賤人生希有心。我見聖王尚以爲難。況復得與分床共坐。佛亦如是。一切智人有大威德。法王無師自然逮覺。一切聲聞及辟支佛無能勝者。況餘世間一切天人阿修羅等。我今得見親近諮請已爲大利。況乃見命分床共坐。甚爲希有。我作是念、如來深具大慈大悲大喜大捨。不自矜高。我爲最尊世間中上。如來功德而自顯現。是名不與一切聲聞辟支佛共。

- (3) 『大法鼓經』(大正 09 p.291 下) ; 迦葉白佛。唯願、世尊、說大法鼓經、擊大法鼓吹大法茗蠶。佛言。善哉善哉、迦葉、汝今聽說大法鼓經。迦葉白佛言。唯然、受教。何以故。是我境界故。是故如來大見敬待。云何爲敬。曾告我言。汝來共坐。以是因緣我應知恩。佛言。善哉、迦葉。以是義故。我敬待汝。迦葉、譬如波斯匿王、善養四兵。若鬪戰時擊大戰鼓、吹大戰茗蠶、對敵堅住。緣斯恩養、戰無遺力、能勝怨敵、國境安寧。如是比丘。我般涅槃後、摩訶迦葉當護持此大法鼓經。以是義故。我分半坐。是故彼當行我所行。於我滅後、堪任廣宣大法鼓經。迦葉白佛言。……

(p.298 中) 迦葉白佛言。善哉善哉、世尊、我自惟省。今始出家受具足戒、得比丘分成阿羅漢。當於如來知恩報恩。以如來昔日、分我半坐。今日復於四大衆中、以大乘法水而灌我頂。

- (4) 『迦葉赴仏般涅槃經』(大正 12 p.1115 中) ; 昔佛在世時、摩訶迦葉於諸比丘中最長年高才明智慧。其身亦有金色相好。佛每說法、常與其對坐。人民見之或呼爲佛師。於是迦葉乃辭佛到伊篩梨山中。一山名普能。
- (5) 『大智度論』(大正 25 p.354 下) ; 問曰。五千比丘中上有千餘上座。所謂需漚樓頻螺迦葉等。何以止說此四人名。答曰。是四比丘是現世無量福田。舍利弗是佛右面弟子。目犍連是佛左面弟子。須菩提修無諍定行空第一。摩訶迦葉行十二頭陀第一。世尊施衣分坐常深心憐愍衆生。

## 【5】パーリ文献の伝承

[0] 釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったとする伝承は、北伝では後世重要な意味をもったようであり処々に散見されるが、南伝には言及がない。パーリ文献ではニカーヤや律だけでなくアッタカターも含めて、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったとする資料は皆無である。根本分裂以後の後世に成立した伝承なのであろうか。それとも古い伝承が南伝には伝わらなかった、もしくは、伝わったが重視されずに忘れ去られたとも考えられよう。明言できないのは、パーリにおいても釈尊がある仏弟子に半座を与えたとする伝承が知られていた可能性があるからである。



[1] それはデーヴァダッタに関する伝承に見られる。『パーリ律』の「破僧健度」(vol. II p.200)に、五事を掲げて破僧を引き起こし象頭山に去ったデーヴァダッタとそれに従った500人の諸比丘のもとに、釈尊によって舍利弗と目連が派遣される場面が描かれている。舍利弗と目連がやってくるのを見て、デーヴァダッタは舍利弗に半座をすすめる(sāriputtaṃ upaḍḍhāsanena nimantesi)。舍利弗はそれを断ってある座をとって坐る。デーヴァダッタは背中が痛いと言って舍利弗に説法を代わってもらい、寝てしまう。その間に舍利弗と目連は500人の諸比丘を教誡して竹林に連れ帰る。

[1-1] これはデーヴァダッタが釈尊のものまねをした場面とされる。『パーリ律』には「ものまね」であるとは表現されていないが、*Jātaka-A.*では、デーヴァダッタが「背中が痛い」などと言って舍利弗に説法を代わってもらう行為<sup>(1)</sup>が釈尊の行為をものまねしたものであると記されている。

*Jātaka-A.* 143 ‘Virocana-j.’ (vol. I p.490)では『パーリ律』と同様に破僧の場面で、デーヴァダッタが「善逝の姿を示しつつ(sugatālayaṃ dassento)」背中が痛いと言って寝てしまう。*Jātaka-A.* 335 ‘Jambuka-j.’ (vol. III p.112)も同様である。具体的に何をしたかの記述を欠くが*Jātaka-A.* 160 ‘Vinilaka-j.’ (vol. II p.038)、*Jātaka-A.* 204 ‘Viraka-j.’ (vol. II p.148)、*Jātaka-A.* 210 ‘Kandagalaka-j.’ (vol. II p.162)にもデーヴァダッタが「善逝の姿を示した」とある。

*Jātaka-A.*の資料では、デーヴァダッタが舍利弗に半座を提供しようとしたことが記述されていないために、『パーリ律』に記されたデーヴァダッタが舍利弗に半座を提供しようとする行為が、背中が痛いと言って寝てしまうことと同様に釈尊のものまねであるか否かは不明である。他の律においても*Jātaka-A.*と同じく、デーヴァダッタが背痛を訴えて舍利弗に説法してもらうくだりのみ記され、舍利弗に半座を勧めたことには言及がない<sup>(2)</sup>。ただし『十誦律』や『根本有部律』「破僧事」は背痛を訴えて説法を代わってもらう行為の他に、舍利弗・目連を歓迎して右手を挙げて「善來」と呼びかける行為や舍利弗のかわりにコーカーリカを右に目連のかわりにカンダドラヴァヤを左に置いて比丘衆に説法することをものまねの行為として加えている<sup>(3)</sup>。

明確ではないものの、『パーリ律』に記されたデーヴァダッタの舍利弗に半座を分かつ行為が釈尊のものまねであるとすれば、釈尊が誰かある仏弟子に半座を与えたことがあったことになる。

- (1) 背中が痛むと言って釈尊が舍利弗などの比丘に説法を代わってもらう場面は、原始仏教聖典資料中に数多くある。舍利弗にかわってもらうものとしては *DN.* 033 ‘Saṅgīti-s.’ (vol. III p.209)、*AN.* 010-007-067 (vol. V p.123)、*AN.* 010-007-068 (vol. V p.126)、『長阿含經』009「衆集經」(大正 01 p.049 下)、『長阿含經』010「十上經」(大正 01 p.052 下)、『中阿含經』088「求法經」(大正 01 p.569 下)、『增一阿含經』026-009 (大正 02 p.639 上)があり、目連に代わってもらうものとしては *SN.* 035-202 (vol. IV p.184)、*SN.* 035-202 (vol. IV p.182) がある。
- (2) 『四分律』「破僧健度」(大正 22 p.909 下)；爾時提婆達多在伽耶山中與無數衆圍遶說法。遙見舍利弗目連來、即言、善來、汝大弟子、雖先不忍而今忍者雖後而善。舍利弗目連到已敷座而坐。爾時提婆達多於大衆前如佛常法、告舍利弗、爲衆僧說法。我今背痛小自停息。時提婆達多法像世尊、自襲疊僧伽梨爲四重、以右脅著地。猶如師子。不覺左脅著地。猶如野干僣

臥鼾眠。

『五分律』「破僧法」（大正 22 p.164 上）；舍利弗目連既至。調達便言。善來、舍利弗目連可就此坐。語言。若人有智先所未聞聞便受行。汝等先是沙門瞿曇第一弟子。今復來爲吾作第一弟子不亦善乎。舍利弗目連默然不答。調達便謂已受其語。即効佛常法、告舍利弗目連。汝可爲衆說法。吾背小痛當自消息。便四疊僧伽梨枕之。右脇著地累脚而臥。不繫念在前須臾眠熟。轉左脇著地呼聲駭人。

- (3) 『十誦律』「調達事」（大正 23 p.265 中）；爾時調達遙見舍利弗目連來、心大歡喜作是念。瞿曇沙門第一好大弟子二人今轉屬我。如佛見舍利弗目連來時、舉右手言。善來、舍利弗目連。調達亦爾。見舍利弗目連來、亦舉右手言。善來、舍利弗目連。即遣右俱伽梨安舍利弗。遣左迦留羅提舍安日連。如佛在衆中語舍利弗目連。汝等爲衆說法。我脊痛小息。調達亦爾。在衆中語舍利弗目連。汝等爲諸比丘說法。我脊痛小息。如佛四疊鬱多羅僧敷、以僧伽梨作枕、右脇臥。調達亦爾。四疊鬱多羅僧敷、以僧伽梨作枕、右脇臥。時有天神、深愛佛法故、令調達睡。轉左脇臥鼾睡寢語。嚙呻振擺斷齒作聲。

『根本有部律』「破僧事」（大正 24 p.203 上）；時提婆達多作佛威儀爲衆說法。孤迦里迦在右邊坐。裏荼達驃居在左邊。時提婆達多遙見大德舍利子目健連來、便作是念。我已成一切智人。而此大德入我衆中、即遣左右侍從令起。即遣舍利子目健連左右而坐。時孤迦梨迦裏荼達驃、既被強移坐處心生瞋恨、善自思惟。我等有大過失助破僧衆。若欲不起恐被瞋打、便即移處。遣大目健連并舍利子居在左右而坐。提婆達多告舍利子曰。我今背痛。汝爲大衆演說妙法。爾時舍利弗默然受請。提婆達多說此語已。便疊僧伽梨支頭右脇而臥。時舍利子以神通力。令遣仰眠不令覺知。（*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, ed. by Raniero Gnoli, Roma, 1977, Part I, p.207）

[2] パーリの文献でもう一つ注目すべきは ‘buddhapaṭibhāga’ という言葉である。

ニカーヤと律にはないが、SN. 016-010 (vol. II p.214) 〈13-1〉の註釈である SN.-A. (vol. II p.175) 〈13-1〉において摩訶迦葉が ‘buddhapaṭibhāga’ と呼ばれているものである。

[2-1] SN. 016-010 は【4】 - [2] に示した、摩訶迦葉の半座に言及する『雜阿含經』1143 の対応經である。

阿難が摩訶迦葉とともに比丘尼たちのところへ行き、摩訶迦葉が比丘尼たちに説法をする。それを聞いていたトゥッラティッサーが「よくもまあ阿難様の面前で、もと外道の摩訶迦葉が説法できるものだ」といった内容の誹謗をなし、摩訶迦葉がこれはいったいどうしたことかと阿難に説明をもとめる。阿難は摩訶迦葉に「がまんしてください」と言って宥めるが、摩訶迦葉は阿難の言葉を「やめなさい」とさえぎり、自身が釈尊によって諸比丘の前で釈尊と同等に心解脱、慧解脱、の境地に達していると言われた (SN. 016-009 vol. II p.210) ことを阿難に述べる (13-1)。

[2-2] SN.-A. は、阿難が摩訶迦葉に比丘尼に説法するように請うたのは ‘buddhapaṭibhāga’ である摩訶迦葉の法話を比丘尼がよく信じるだろうと考えてのことであったといい、また摩訶迦葉が阿難の言葉をさえぎったことについて註釈して、阿難が一比丘尼の言葉をさえぎらずに、 ‘buddhapaṭibhāga’ である摩訶迦葉の言葉をさえぎってしまったことから、摩訶迦葉は僧伽が阿難にいらぬ嫌疑をかけないように配慮したとする。また摩訶迦葉は自身が ‘buddhapaṭibhāga’ であることを明かすために阿難に、自身が釈尊から釈

尊と同等に禪定・神通を得ていることを認められたことを宣言する〈13-1〉。

[2-3] この‘buddhapaṭibhāga’ という複合語の後分の‘-paṭibhāga’はPTSの*Pāli-English Dictionary*によれば① counterpart, likeness, resemblance, ② rejoinder, ③ counterpart, opposite, contrary といった意味があるが、ここでは①の「～のような」という意味で用いられている<sup>(1)</sup>。‘buddhapaṭibhāga’は「ブッダに似ている者」「ブッダのような者」という意味になる<sup>(2)</sup>。

『雑阿含経』1143には摩訶迦葉が釈尊から半座を提供されたことが述べられている。その対応経であるSN. 016-010には「半座」は言及されていないが、そのアッタカターにおいて摩訶迦葉が‘buddhapaṭibhāga’「ブッダのような者」と呼ばれているのは、「半座」と‘buddhapaṭibhāga’の間の関連を窺わせる<sup>(3)</sup>。

- (1) 例を挙げると、dasabalassa brahmasarirapaṭibhāgaṃ rūpaṃ「十力(仏)の梵天の身体のような容姿」(*Jātaka-A.* 230 ‘Dutiyapalāyi-j.’ vol. II p.219) ; bhantamigapaṭibhāgo kiso「迷走する鹿のように瘦せた」(*Jātaka-A.* 230 ‘Ummadanti-j.’ vol. V p.209) などがある。
- (2) ちなみに如来は「無比のもの」であるという意味合いで‘appaṭibhāga’という表現が用いられることから考えれば、‘buddhapaṭibhāga’は逆説的な表現である。例えばAN. 001-013-001~007 (vol. I p.022) ; 「諸比丘よ、唯一の人が世に出現する。彼は二人とおらず (adutiya)、仲間がおらず (asahāya)、似た者がおらず (appaṭima)、対等の者がおらず (appaṭisama)、等しい者がおらず (appaṭibhāga)、比肩する者がおらず (appaṭipuggala)、等しい者がおらず (asama)、無等等であり (asamasama)、人間の最上者である。それは誰か。如来……である」。
- (3) ‘paṭibhāga’の意味を動詞に戻って考えるならば、パーリ語では的確な用例が見出せないので仏教梵語の語形で見ると、‘pratibhajati’には「分ける (divides)」という意味がある。*Mahāvastu* (vol. II p.042) で菩薩の誕生の際にやってきたアシタ仙が以下のように言う。

sukhitā ime naramarū drakṣyante gaṇavarasya madhyagataṃ /  
amṛtaṃ pratibhajamānaṃ ahan tu jīrṇo ti rodāmi //

これらの幸運な人々と神々は、〔ブッダが〕最上の群集(僧伽)の真ん中に行って、甘露を分けるのを見るであろう。しかし私は年をとっていると嘆く。

‘-paṭibhāga’が「～に似た者」という意味になるのは、何かの要素を分かち合うといったところから成立するのではなかろうか。

## [6] 摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承の意味

[0] 【3】で見たように「半座を分かつ」ことは、半座を共有する2人が、①容姿が等しく、②同等の権限を有し、③なにからなにまで同一であり能力も等しいことを表していると考えられる。この仮定が正しければ、釈尊から半座を分かたれた摩訶迦葉は釈尊と容姿が等しく、同等の権限を有し、同一であって等しい能力を有していたことになる。

[1] 摩訶迦葉が釈尊と容姿が等しかったという情報は、【4】の[1]から[8]に見た釈尊が摩訶迦葉に半座を分かたれたことを伝える記事の中には含まれていない。しかしながら

『過去現在因果経』に、摩訶迦葉が釈尊と同じく三十二相を有していたとあるのをはじめ、他にも『根本有部律』には「衆相具足」とあり、『毘尼母経』には「大人之相」を有していたとある<sup>(1)</sup>。このように容姿の点で釈尊と摩訶迦葉が等しかったとする伝承も存在する。

ただし、釈尊の異母弟にあたるナンダや従兄弟のデーヴァダッタも釈尊と容姿が似ていたとされ、「三十相」と相が不足している場合もあるが、ナンダについては「三十二相」とされることもある<sup>(2)</sup>。

(1) 『過去現在因果経』(大正03 p.653上)〈14-11〉;爾時憍羅厥叉國有一婆羅門。名曰迦葉。有三十二相。聰明智慧。……

『根本有部律』「(比丘尼)波羅市迦001」(大正23 p.909上)〈14-5〉;月滿生男。姿容超絶、光相炳耀如瞻部金、頂圓如蓋、臂長過膝、鼻脩且直、眉高而長、額廣平正、衆相具足。

『毘尼母経』(大正24 p.803下)〈14-7〉;此婆羅門家生一子。字畢波羅延。父母種姓清淨。諸婆羅門所有經書無不悉達。乃至大人之相亦能達之。

【論文8】【11】摩訶迦葉③「幼名等」の表の「特性」の欄を参照。

(2) ナンダに三十二相があったとするものには以下のものがある。

『給孤長者女得度因縁経』(大正02 p.851上);是佛弟子名曰難陀。淨飯王之子是佛親弟。比佛身量而短四指。三十二相莊嚴具足。(Sumāgadhāvadāna (岩本裕『『スマーガダー＝アヴァダーナ』研究』仏教説話研究 第五卷 開明書院 1979年 p.041)

三十相とするものは枚挙にいとまがない。例を挙げるにとどめる。

『過去現在因果経』(大正03 p.628中);爾時太子至年十歳。諸釋種中五百童子。皆亦同年。太子従弟提婆達多。次名難陀。次名孫陀羅難陀等。或有三十相三十一相者。或復雖有三十二相、相不分明。

『僧祇律』「単提048」(大正22 p.369上);爾時尊者孫陀羅難陀佛姨。母子大愛道所生。有三十相。少白毫相耳垂垂相。。

『十誦律』「波夜提090」(大正23 p.130中);爾時長老難陀。是佛弟姨母所生。與佛身相似、有三十相。短佛四指。

『分別功德論』(大正25 p.047上);諸比丘各各有相。身子有七。目連有五。阿難有二十。獨難陀有三十相。難陀金色。阿難銀色。

『大智度論』(大正25 p.092上);難陀提婆達等皆有三十相。

[2] 帝釈天がマーンダートリに半座を提供したことが王国を二分することと同義であるように、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったことも、ここでは決して僧団を二分することではないけれども、釈尊によって摩訶迦葉が釈尊と同等の僧伽のリーダー格の地位に置かれたことを示していると考えられる。

[2-1] 釈尊が摩訶迦葉を自身の地位に置こうとしたことは、かえって釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつ伝承を伝えていないパーリのアッタカターで強調されている。SN. 016-006~008 (vol. II p.203) の註釈である SN.-A. (vol. II p.173) では、釈尊が摩訶迦葉に「私か汝のどちらかが説法しなければならない」と法を説くことを要請したこと〈9-1〉について註釈し、そのように言ったのは摩訶迦葉長老を自身の地位に置くため (theraṃ attano thāne thapanattham) であったとする〈9-1〉。「自身の立場に置く」とは「自身の代理にする」という意であると考えられる。

また SN. 016-011 (vol. II p.217) の註釈である SN.-A. (vol. II p.199) では、釈尊

が摩訶迦葉にはじめて会った日に釈尊が摩訶迦葉と衣を交換したこと〈14-1〉について註釈し、釈尊が摩訶迦葉の衣をほめたのは、衣を交換したいと考えたからであり、そのように考えたのは摩訶迦葉長老を自身の地位に置こうとしたから (theraṃ attano ṭhāne ṭhapetukāmatāya) であったとする〈14-2〉。

*DN.-A.* (vol. I p.003)、*Khuddakapāṭha-A.* (p.090)、*Samantapāsādikā* (vol. I p.005) では摩訶迦葉が、釈尊から「九次第定と六神通からなる上人法において〔私を〕ご自身とまったく等しい地位におくことで愛護された (navānupubbavīhāraḥaḥabhiññāppabhede uttarimanussadhamme attanā samasamaṭṭhapanena ca anuggahito)」ことを思い出しながら結集を決心する場面が語られている<sup>(1)</sup>。

*SN.* 016-006~008の対応経『雑阿含』1138~1140 (大正02 p.300中)においても、釈尊が摩訶迦葉に「汝が諸比丘を教化せよ。なぜなら、私がいつも諸比丘を教化しているように、汝もそのようにすべきであるから (汝當爲諸比丘説法教誡教授。所以者何。我常爲諸比丘説法教誡教授。汝亦應爾)」と要請している。*SN.* 016-011の対応経である『雑阿含経』1144 (大正02 p.302下)には衣の交換のことが語られている。アッタカターの解釈が妥当であるならば、これらは釈尊が摩訶迦葉を自身の地位に置こうとされたことを示すことになる。

[2-2] なお「自身と等しい地位に置く」ことが半座とかかわることを示す資料として、*MN.* 026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.165) と *MN.* 085 ‘Bodhirājakumāra-s.’ (vol. II p.093)、*Milindapañho* (p.235) に「アーラーラ・カーラーマ師は私と等しく、自身と等しい弟子である私を同等に位置づけた (āḷāro kālāmo ācariyo me samāno antevāsiṃ maṃ samānaṃ attano samasamaṃ ṭhapesi)」とあるが、【2】-【2】で紹介した『仏本行集経』では同じ文脈においてアーラーラ・カーラーマが菩薩に半座を分かっている。

ウッタカ・ラーマプッタは「同梵行者であり、私と等しく私を師の地位に置いた (udako rāmaputto sabrahmacārī me samāno ācariyaṭṭhāne ca maṃ ṭhapesi)」として、菩薩を同等の地位ではなくて師の地位に置いたためか、『仏本行集経』はここでは半座に言及しない<sup>(2)</sup>。

(1) *Udāna-A.* (p.195) にも引用されている。

(2) 『仏本行集経』「答羅摩子品」(大正03 p.757中)

なお摩訶迦葉が釈尊と同列に扱われる資料については、【論文8】【8】参照。

【3】釈尊と摩訶迦葉がなにからなにまで同一であることを示している資料を挙げるのは困難であるが、【4】-【1】で紹介した *SN.* 016-009 (vol. II p.210)、『雑阿含経』1142、『別訳雑阿含経』117、『中本起経』の「大迦葉始来品」と【4】-【2】で紹介した *SN.* 016-010 (vol. II p.214)、『雑阿含経』1143において、釈尊と摩訶迦葉の能力は等しい (同等の禪定・神通を有する) とされている。

【4】釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったという伝承は、摩訶迦葉が釈尊と容姿が等しく、同等の地位と等しい能力を有していることを示している。しかしながら「半座を分かつ」と

いう行為に、より多くのことがらを読み込むこともできよう。

帝釈天がアルジュナに半座を提供する（【1】 - 【3】）のは、父が息子に半座を提供していることになる。帝釈天とマーンダートリとの関係も、マーンダートリの誕生の際に指をしゃぶらせて養ったのが帝釈天であるので、あるいは父子の間柄であると考えられる。そして摩訶迦葉は釈尊の嗣子、法の相続者《14》とされる。

以上見てきたように「半座を分かつ」という行為には「客に席のもう一方の半分を提供して大きな敬意を示す」というだけではすまされないもっと重要な意味が含まれていることが分かる。

なお釈尊が摩訶迦葉に「半座」を分かたれたという伝承は「北伝」にしかないことを指摘した。しかし南伝でも後世には摩訶迦葉は「ブッダのような者」「ブッダに似た者」「*buddhapaṭibhāga*」とされて、これはまさに「半座」が含意するものを一語で端的に表現したものと解される。「半座」はそれを説話的脚色をもって、具象的、視覚的に示そうとしたものと言えるであろう。摩訶迦葉の位置づけについて「半座」への言及のあるなしによって北伝と南伝との間に差を設けるのは、適当ではないと考えられる。

#### 【付録】 中国撰述文献に見られる釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承

- (1) 『妙法蓮華經文句』（大正 34 p.010 中）；頭陀既久鬚髮長衣服弊、來詣佛所諸比丘起慢。佛命令就佛半座共坐。迦葉不肯。佛言吾有四禪。禪定息心從始至終無有耗損。迦葉亦然。吾有大慈仁覆一切。汝亦如此體性亦慈。吾有大悲濟度衆生。汝亦如是。吾有四神三昧。一無形二無量意三清淨積四不退轉。汝亦如是。吾有六通汝亦如是。吾有四定。一禪定二智定三慧定四戒定。汝亦如是。……增一阿含云。一婆羅門白佛。昨有婆羅門至我家。何者是。佛指迦葉。又問。此沙門非婆羅門。佛言沙門法律、婆羅門法律、我皆知。迦葉亦爾。迦葉功德與我不異。何故不坐。諸比丘聞佛所讚。心驚毛豎佛引本因緣。昔有聖王號文陀竭。高才絕倫。天帝欽德遣千馬車造闕迎王。天帝出候與王同坐。相娛樂已送王還宮。昔迦葉以生死座命吾同坐。吾今成佛以正法座報其往勳。對佛坐時天人咸謂佛師。又迦葉共阿難。爲比丘尼說法。有一比丘尼不喜云。販針兒在針師前賣針。迦葉語阿難言。此比丘尼以汝爲針師。我爲販針兒。迦葉語尼言。佛說月喻經。日日增長常如新學者唯大迦葉。汝聞不。於大衆中分半座。汝聞不。……
- (2) 『阿彌陀經疏』（大正 37 p.315 下）；又迦葉本起經云。王舍城內有大富梵志名尼拘律。此云無恙。有子名畢撥羅。即大迦葉也。迦葉是姓。畢撥羅是字。佛弟子中頭陀第一。佛當見來分座令坐。
- (3) 『注維摩詰經』（大正 38 p.347 下）；什曰。先佛出家。第一頭陀者也。昔一時從山中出、形體垢膩著舊弊衣、來詣佛所。諸比丘見之起輕賤意。佛欲除諸比丘輕慢心故讚言。善來、迦葉。即分床坐。迦葉辭曰。佛爲大師。我爲弟子。云何共坐。佛言。我禪定解脫智慧三昧大慈大悲教化衆生。汝亦如是。有何差別。諸比丘聞已發希有心咸興恭敬。迦葉聞是已常學佛行。……
- (4) 『維摩經略疏』（大正 38 p.616 中）；初總呵云。有慈悲心而不能普者。聲聞之中

最有慈悲。如來所歎命共同坐。但小乘慈悲而不圓普。利他不等捨富從貧。

- (5) 『維摩經略疏垂裕記』(大正 38 p.779 下) ; 初總詞。有慈悲心等者荊溪云。抑揚之妙事在於斯。以歎有悲抑之令普故也。如來所歎。命共同坐者。迦葉一時從山中出、形體垢膩著麤弊衣來詣佛所。諸比丘見之起輕賤意。佛欲除諸比丘輕慢心。故讚言。善來。即分床命坐。迦葉辭曰。佛為大師我為弟子。云何共坐。佛言。我禪定解脫智慧三昧大悲教化衆生。汝亦如是。有何差別。諸比丘聞已起慕敬心。
- (6) 『四分律刪繁補欠行事鈔』(大正 40 p.129 中) ; 華手經云。以迦葉行頭陀苦行故來至佛所。如來移身分座與迦葉。辭讓不受。雜含中。佛親命以半座。手授僧伽梨易迦葉所著大衣。於大眾中稱讚頭陀大行。
- (7) 『四分律行事鈔資持記』(大正 40 p.390 下) ; 華手經中言。辭讓者、彼云、我見聖王尚以為難。況復得與分床共坐。我今得見親近咨請已為大利。況乃見命分床共坐甚為希有。如來深具慈悲喜捨等雜含緣同。但加易衣稱讚為異。彼明佛在祇桓諸比丘見迦葉著麤衣來起於慢心。佛即易衣以息彼慢。由行苦行佛尚尊敬則知功勝矣。……  
(p.411 中) 練若中汎話。謂問疾安慰。以為勸誘之端。捨座即分半座與迦葉坐。捨衣謂脫所著衣。易彼糞掃衣披之。
- (8) 『大乘起信論裂網疏』(大正 44 p.458 上) ; 西土初祖摩訶迦葉。終身行此勝行。佛於天人大眾之中讚云。正法久住。全賴此人。所以分半座而令坐。付法眼以傳心也。
- (9) 『汾陽無德禪師語錄』(大正 47 p.606 下) ; 良久復云。祖意難窮。得之者可越階梯。教乘易曉。失之者永隔毫釐。是以禪律同途聖凡不異。迷情不了。背覺合塵。如識衣珠。不從別得。故我大覺世尊。於多子塔前分半座。告摩訶迦葉云。吾有清淨法眼。涅槃妙心。實相無相。微妙正法。將付囑汝。汝當流布。勿令斷絕。如是展轉。西天二十八祖。唐來六祖。……
- (10) 『円悟禪師語錄』(大正 47 p.786 下) ; 釋迦老多子塔前分半座。已密授此印。爾後拈華是第二重公案。……
- (11) 『六祖大師法寶檀經』(大正 48 p.345 下) ; 妙道虛玄不可思議。忘言得旨端可悟明。故世尊分座於多子塔前。拈華於靈山會上。似火與火以心印心。西傳四七至菩提達磨。……
- (12) 『仏祖統紀』(大正 49 p.169 下) ; 迦葉頭陀既久、髮長衣弊、來詣佛所。諸比丘皆起慢心。佛分半座令坐。迦葉不肯。佛即廣讚迦葉功德。與我不異。何故不坐。諸比丘聞為之心驚。佛復為說本因。昔有文竭陀(輔行云即頂生王也)高才絕倫。天帝欽其德。遣千馬車造闕迎之。天帝出候命王同坐。共相娛樂送王還宮。昔迦葉以生死座命吾同坐。吾今成佛以正法座報其往勳。迦葉共佛坐。時天人咸謂佛師。即起鳴佛足云。佛是我師。我是弟子(云云)
- (13) 『釈氏稽古略』(大正 49 p.754 上) ; 西天一祖摩訶迦葉尊者摩竭陀國人也。……尊者趨於竹林精舍。特申恭敬。如來乃分座命之坐。時大眾皆驚。謂其何以與此。如來為衆廣說其夙緣。以斷群疑。尋為之說法。而尊者即座成道。然其積修勝德。而智慧高遠故。如來嘗曰。我今所有大慈大悲四禪三昧無量功德以自莊嚴。而迦葉比丘亦復如是。……
- (14) 『付法藏因緣伝』(大正 50 p.298 中) ; 爾時迦葉披糞掃衣、來詣佛所稽首禮敬

合掌而立白佛言。世尊、我今歸依無上清涼。願哀納受聽在末次。世尊歎曰。善來、迦葉。即分半座命令就坐。迦葉白佛。我是如來末行弟子。願命分座不敢順旨。是時衆會咸生疑曰。此老沙門有何異德。乃令天尊分座命之。此人殊勝唯佛知耳。於是如來知衆心念欲決所疑。即宣迦葉大行淵廣。世尊又曰。我今所有大慈大悲四禪三昧無量功德以自莊嚴。迦葉比丘亦復如是。又於往昔過去久遠。時有聖王號文陀竭。高才超世智慧無倫。時天帝釋欽敬其德。遣七寶車造闕迎王。時乘天車飛空而往。天帝出迎與共同坐。相娛樂已送王還宮。佛告比丘。爾時天帝今迦葉是。文陀竭王則吾身是。迦葉往昔以生死座命吾同坐。故吾今日成無上道。以正法座報其本勳。爾時世尊即為迦葉。如應說法示教利喜。譬如鮮淨白氈易受染色。即於座上得阿羅漢。三明六通具八解脫。高才勇猛儀相安詳。常與如來對坐說法。……

(15) 『続伝燈録』(大正 51 p.478 下) ; 師曰。兩重公案。問昔日靈山分半座。飲光對面被搽糊。今朝此席又如是。還有完全句也無。……

(p.485 中) 師曰。切忌地盈虛。問昔日靈山分半座。二師相見事如何。

(16) 『伝法正宗記』(大正 51 p.719 上) ; 入山以杜多行自修。會空中有告者曰。佛已出世。請往師。之尊者即趨於竹林精舍。致禮勤敬。如來乃分座命之坐。而大衆皆驚。謂其何以與此。如來知之。乃說其夙緣以斷群疑。尋爲之說法。而尊者即座成道。然其積修勝德。而智慧高遠。故如來嘗曰。我今所有大慈大悲四禪三昧無量功德以自莊嚴。而迦葉比丘亦復如是。……

(17) 『法苑珠林』(大正 53 p.541 下) ; 夫婦節操深厭世間。啓辭父母求欲出家。父母見已遂便聽許。於是夫婦俱共出家來至佛所。佛與分座。佛為說法。即於座上得阿羅漢。婦於後時亦得羅漢。迦葉在世常與如來對坐說法。……

(18) 『一切經音義』(大正 54 p.372 上) ; 糞掃衣(上分問反下桑到反。糞掃衣者、多聞知足上行比丘常服衣也。此比丘高行制食不受施利、捨棄輕妙上好衣服、常拾取人間所棄糞掃中破帛、於河澗中浣濯令淨補納成衣、名糞掃衣。今亦通名納衣。律文名無畏衣。惡人劫賊之所不奪。經中亦名功德衣。一切如來之所讚嘆服。此衣者諸天常來禮敬供養。是故如來讚大迦葉命令同坐易衣而披之、故名功德衣也)